

1. 公害対策

1) 産業廃棄物の適正処理マニュアル

＜2005年度記載＞

1994年、キッコーマン環境部では、各事業所向けに、廃棄物処理を適正に行うための考え方や委託方法などをとりまとめたマニュアルを作成しました。その後も関連法規の改正に応じて適宜修正を加えています。

＜2009年度記載＞

2009年3月、これまでのマニュアルを、関連法令の改正点との適合性をチェックした上で、分かりやすい内容となるよう全体構成を改訂しました。

改訂版「産業廃棄物の適正処理マニュアル」は、以下の8章から構成されています。

(1) 廃棄物とは

産業廃棄物と一般廃棄物の区別や産業廃棄物の種類を示しています。

(2) 排出事業者の責任と役割

廃棄物を適正に処理するため、排出事業者の責任や役割を9項目で示しています。

(3) 新規産業廃棄物処理委託契約書の作成手順

新規に産業廃棄物処理の委託契約書を締結する場合のチェックリストに基づき、環境部との連携、中間処理業者の選定、業者視察、締結に至る具体的な手順を示しています。

(4) 委託処理に際しての留意事項

委託前、委託時、委託後に分けて委託処理に必要な留意事項を示しています。

(5) 産業廃棄物の保管・処理の基準

産業廃棄物の保管基準や産業廃棄物の収集・運搬基準等について示しています。

(6) 多量排出事業場処理計画の作成

多量排出事業場処理計画及び前年度の実施状況の報告について示しています。

(7) 処理が複雑な廃棄物の適正処理法

蛍光灯など稀に廃棄する物についての適正処理の方法を示しています。

(8) 事務系排出物の処理について

どのような排出物が有価物、一般廃棄物、産業廃棄物に該当するかを具体的に示し、事務部門での廃棄物の適正処理を促しています。

2) 大気汚染の防止

＜2006年度記載＞

キッコーマングループでは、硫黄酸化物 (SOx)、窒素酸化物 (NOx)、ばいじんについて地域ごとに定められた濃度規制、総量規制を順守し、事業所ごとに自主規制基準も設けて排出管理をしています。

具体的な施策としては、低硫黄重油の使用によるSOxの排出量削減、低窒素重油と低NOxバーナー装置の利用、低NOx型ボイラーの設置によるNOxの排出量削減、特A重油切り替えによるばいじんの排出量削減などを行っています。また、ダイオキシンの発生を防止するため、1998年までに焼却炉を全廃しました。その後もダイオキシン発生実態調査を実施し、その都度問題がないことを確認しています。

【キッコーマン食品野田工場の例】

野田工場には、大型ボイラー、小型ボイラー、冷温水ユニットなどのばい煙発生装置が数多く稼働しています。ボイラーの燃料は全て特A重油に切り替え済み（一部ではしょうゆ粕やしょうゆ油を使用、また一部では天然ガスへの切り替えを計画中）です。

いずれも、性能検査や定期整備を行って維持管理を徹底させています。また、日常的にSOx、NOx、燃料使用量、ばい煙などを監視すると共に、蒸気流量計監視により蒸気使用量を把握しています。また、年2回、大気汚染防止法施行規則に基づき、環境・安全分析センターがばい煙等の測定を行っています。

光化学スモッグが発生した時には、

- 第1次処置および第2次処置による燃料使用量の抑制
- 製造部門及び間接部門一時停止による蒸気発生量の抑制
- 大型ボイラーから小型ボイラーへの切り替えによる燃料使用量の抑制
- 蒸気流量計監視による蒸気使用量の把握
- 緊急時ばい煙量減少処置報告書による結果報告を行っています。

3) 物流の大気汚染防止努力

＜2006年度記載＞

総武物流株式会社は、1924年（大正13年）創立以来、キッコーマングループ各社の物流輸送を担当し、物流加工情報システム企業として拡大発展を図ってきました。現在では、「お客様にまごころをお届けする」ことをモットーに、広域物流企業として物流トータルシステムの提案ができるよう、経営力を高める努力を進めています。また、安全・確実・迅速・創意・工夫を行動規範として、経営効率を高めると共に、環境・人・企業の調和を目指しています。

その一環として注力しているのが、「黒煙低減による大気汚染の防止策」です。

総武物流では、2005年8月に7台の低公害車を導入しました。これらは、低PM認定車・尿素システム車で、他のディーゼル車に比べてNOx、PMの排出量が少ないという長所を持っています。特にPM排出量では（PM排出係数で換算すると）70%以上の削減が期待できます。

2006年10月現在、総武物流では20台のディーゼル車が稼働していますが、その黒煙低減を図るため、社内に「環境管理安全推進委員会」を設置し、各自動車メーカーの推奨基準値を参考にした環境配慮社内基準「自動車の点検・整備自主基準」（法定点検以外）を作成しました。

【点検・整備自主基準】

自主基準項目の内、ドライバーが自ら行うのは、月1回の「黒煙」「エアコンガス漏れ」「タイヤ空気圧」チェックで、他項目は、総武物流と『業務委託契約書』を取り交わしている、専門の整備業者に委ねています。

● ドライバーの点検：タイヤの空気圧チェック

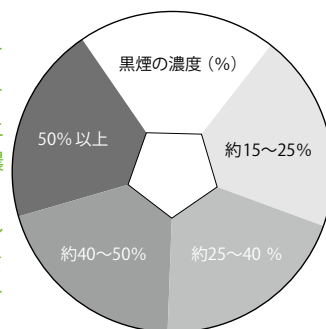


ドライバー自主点検の内の「黒煙チェック」は、次の3段階で行われています。

- 日常点検：アイドリング状態で排ガスの色、汚れ具合を目視で確認
- 自主点検：毎月1回「黒煙チャート」*1を用いて確認し、結果を記録

○定期点検：3ヶ月毎、車検時に整備業者がスモークテスターを使用して確認し、結果を「点検整備記録簿」に記録
ドライバーが「基準値を超える黒煙濃度」と判断した場合は、社内の「整備管理者」を通して整備業者に整備を依頼し、整備後は、「整備管理者」とドライバーが整備内容を再確認しています。

*1「黒煙チャート」（右図）
車両の形式毎に設定されている規制値と排ガスの色を対比するための器具。円盤上に、「白」（排気ガス内黒煙濃度約15%以下）から始まり、ごく薄いグレイ（約15～25%）から黒（50%以上）まで5段階に色分けが示されているので、排気ガスに円盤をかざすことにより黒煙濃度が視認できる。



総武物流は、2005年6月、運輸業界や企業顧客間でも関心が高まっている「グリーン経営認証」（交通エコロジー・モビリティ財団認証）を取得しました。

● 総武物流の自主基準項目一覧

自主基準項目	自主基準内容	
	走行距離 (km)	点検期間
黒煙チェック		月1回
エアコンガス漏れチェック		月1回
エアフィルターの清掃(乾式)	5,000	
エアフィルターの交換(乾式、湿式)	50,000	
エンジンオイルの交換	30,000	
エンジンオイルフィルターの交換	30,000	
タイヤの空気圧チェック		月1回
トランスミッションオイル漏れの点検		半年1回
トランスミッションオイルの交換	50,000～60,000	
デフレンシャルオイル漏れの点検		半年1回
デフレンシャルオイルの交換	50,000～60,000	
燃料噴射系のオーバーホール又は交換	50,000～60,000	

4) 黒色汚染（黒かび）について

<2005年度記載>

醸造工場を中心とした100～200mの範囲にある建物の屋根や樹木などが、一部黒ずんできることがあります。これを「黒色汚染」（あるいは、『黒かび』）と言います。この汚れは、水（ときによっては若干の洗剤の併用）で洗浄するときれいに除去できますし、病原性は認められていません。しかし、キッコーマンは、近隣の方々のご意向を重視し、対策を進めています。具体的には、工場周辺の住宅を定期的に訪問してご意見やご要望をお聞きし、被害や苦情があれば、その都度話し合い、原因究明、対策に務め、納得がいただけるように対応しています。

【黒色汚染の原因】

主な原因は黒い色素を生成する『オーレオバシディウム属（*Aureobasidium*）』（旧称プルラリア菌 *Pullularia*）が、屋根や壁などに付着して生育するために黒く見えるものです。この菌はエチルアルコールを栄養源として育ちますので、アルコールを含む環境を好んで生育します。

酒、味噌、醤油などの醸造工場では、酵母によってエチルアルコールが作られていますので、この菌が醸造工場周辺で生育することが多くなります。

オーレオバシディウム属は、世界的に、空气中に最も多く普遍的に存在する菌の一種で、北極上空9,000フィート（2,700m）の空气中にさえ多量に存在していたという報告があります。このように多く浮遊しているにもかかわらず、アレルギーを引き起こす原因となったという報告はありません。また、千葉県衛生研究所、順天堂大医学部、キッコーマン研究開発本部で詳細な動物試験を実施した結果でも病原性は認められず、安全性に関しては問題ないと考えています。

【キッコーマンにおける対応策】

(1) 発生源防止対策

工場から出てくる香気にアルコールが含まれていますので、これが工場の外に洩れないよう、次のように工程と設備の改善に努めています。

- 発生源密閉のクローズド・システムを採用し開放タンクなどはシートで覆っています。
- 工場からの排気ダクトにウォーター・スプレー（水洗浄装置）を設置し、排気中のアルコールを洗浄除去しています。
- 排気ガス中のアルコールを活性炭繊維に吸着し、回収する装置を設置しています。



(2) 環境調査

工場内、工場周辺の空気中のエチルアルコール濃度を定期的におよび必要に応じて測定、解析し、改善に役立てています。

<2012年度記載>

キッコーマン食品野田工場製造第1部では、2003年から発酵タンクを開放型タンクから大型密閉型タンクに代えてきました。開放型タンクは2008年から使用を止めました。定期的に工場周辺の大気中アルコール濃度を測定していますが、作業方法の改善も含め、発酵タンクからのアルコール発生をかなり抑えることが出来ました。今後も黒色汚染防止に努めます。

● 密閉型発酵タンク



<2013年度記載>

2012年、キッコーマン食品野田工場の仕込タンク室に、最大60m³/minの空気清浄効果を持つ、排気を水洗浄するアルコール除去装置を新設しました（試運転時に89%の除去率であることを確認しています）。



5) 緊急事態対応訓練

(1) キッコーマン食品野田工場

＜2007年度記載＞

工場で使用している重油や製造・保管しているしょうゆおよび半製品のしょうゆなどが流出すると、周辺の河川の水質を汚濁させる原因となります。キッコーマン食品では、こうした事態に対処するため水質汚染防止には万全の体制を敷いていますが、万が一の発生に備えて、各工場で、それぞれの指示書に従っての緊急事態対応訓練を年1回以上行っています。



(2) 日本デルモンテ群馬工場

＜2010年度記載＞

群馬工場では、2009年5月、マニュアルに従い緊急対応部品39点の点検を行いました。続いて、2010年1月に緊急対応施設の稼働状況を確認しました。当日は、排水処理沈殿槽に汚泥が浮上し外部に漏れ出したことを想定。緊急対応チーム9名が常備されている緊急対応部品（ゲート、土のう、出口バルブ、排水ピットポンプ、緊急用水中ポンプ、緊急用電源通電、緊急用ホース、排水予備槽）を順に確認し、さらに作業の点検を行い、沈殿槽出口バルブを切り替えることで、漏出が想定された範囲内で防止されることを確認しました。



(3) キッコーマン食品高砂工場

＜2011年度記載＞

2010年10月、キッコーマン食品高砂工場では、しょうゆ輸送中の1klコンテナが横転してしょうゆが雨水路に流入したとの想定のもとに、設備グループ、総務グループ、運送担当業者が協働して緊急対応訓練を行いました。緊急対応指示書に従い、現場での異常発見から、関係者への連絡、緊急指令、現場周辺に土のう設置、外部への排水門閉鎖、雨水路を工程排水路に接続、汲み上げ開始に至る一連の作業を実際に行い、指示書と作業フローの整合性を確認しました。



6) 工場構内作業規定の制定

＜2011年度記載＞

2010年12月、日本デルモンテ群馬工場では、外部の工業者や輸送業者が工場内で作業を円滑、安全、かつ環境保全に配慮して遂行できるよう、工場構内作業規定などを成文化しました。内容は、工場内への入場や退場の手続き、作業時間、工場資産の保全、服装などを記した「工場内作業規定」と、環境に関する法規制の遵守、緊急事態への対応などを記した「間接影響緩和のための協力依頼事項」からなり、関連業者全てに標準化された構内作業の遂行を求めています。群馬工場では、この規定が正しく順守されるよう、外部業者を対象にした講習会を、2010年度は5回開いています。



2. 環境マネジメント

1) ISO14001認証取得

＜2005年度記載＞

(1) ISO14001認証取得 (2005年度まで)

キッコーマングループは、2005年度までに国内主要事業所でISO14001を取得することを、中長期環境保全目標の一つに掲げています。(2006年2月の近畿支社取得をもって本目標は達成しました。)

キッコーマングループは『KEEP CLEAN』をスローガンにして環境問題に取り組み、サイト(事業所)、ローカル(地域)、グローバル(地球)に配慮した環境マネジメントシステムの構築に努めてきました。

1995年6月、社内の環境管理システムの稼動状況进行评估するため、14事業所を対象に、ISO14001に準拠した内部監査を実施しました。これは、書類監査、現地監査、トップ監査の3段階を経た厳しいチェックでしたが、定期的を実施することで各事業所が競い合い、環境マネジメントが常に高いレベルで維持されることを狙ったものでした。

● ISO14001認証取得状況一覧

ISO14001認証取得状況		
1997年	5月	野田プラント
1998年	4月	高砂工場
1999年	4月	日本デルモンテ(福島工場)
	6月	千歳工場
	11月	野田工場(野田・中根エリア)
2000年	5月	日本デルモンテ(群馬工場)
	8月	マンズワイン
	11月	酒造工場(尾島)
2001年	7月	日本デルモンテ(長野工場)
	10月	野田工場(中野台エリア)
2002年	6月	KFIウィスコンシン工場
	8月	KFE
	10月	KSP
	12月	江戸川プラント
2003年	3月	酒造工場(拡大取得)
	3月	KFIカリフォルニア工場
2004年	4月	研究本部
	10月	野田本社
2005年	4月	日本デルモンテ全社
	5月	東京本社
2006年	2月	近畿支社

1997年、野田プラント(現キッコーマン食品野田工場製造第1部)がISO14001を取得しました。これは、日本の食品製造業界で最初の取得でした。その後、各工場、事業所がISO14001の取得を続け、現在では、国内外の主要な事業所のほぼ全てで取得が終了しています。今後さらに、全社的にISO14001認証取得を目指し、各事業所に拡大・展開していきます。

(注) フードケミファは、岐阜工場が2002年2月、鴨川工場が2002年10月、埼玉工場が2003年6月に取得しています。

キッコーマングループがISO14001認証取得を目指すのは、以下の目的によるものです。

- 環境保全への社会的責任
- 利害関係者への環境保証
- 社内、関係企業の体質強化
- 環境リスクの回避
- 企業のイメージアップ

(2) 一括認証取得活動

＜2010年度記載＞

キッコーマングループは、2011年度までにISO14001の一括認証を取得する目標を定め、2009年度より取得に向けての具体的な活動を開始しました。

【2009年度】

＜2010年度記載＞

9月 一括認証取得に向けた新しい環境マネジメント推進体制の確立
一括認証取得理由の啓発活動を開始

10月 認証機関の決定
マニュアル原案策定を開始
ワーキンググループを結成、定期会合をスタート
環境保全推進委員会を開催

11月 マニュアル原案と現場システムとの整合性を確認

12月 作業計画を開示

1月 現場の受け入れ態勢を構築

2月 一括認証取得準備会議を開催

3月 マニュアルの確定

【2010年度】

＜2011年度記載＞

5月 環境方針・目的・目標・マニュアル配布

6月 一括認証取得キックオフ 環境保全推進委員会を開催

7月 運用開始

9月 統括内部監査開始

11月 環境保全推進委員会で進捗チェック

VI 環境マネジメントの推進

- 12月 統括内部監査終了
- 1月 各エリアマネジメントレビュー実施
第一段階（文書）審査（2月まで）
- 3月 統括マネジメントレビュー実施

【2011年度】

- 4月 2011年度の目的・目標発信
- 5月 第二段階（現場）審査
- 6月 キッコーマングループとしての一括認証取得
（この際、江戸川食品が一括認証の対象企業のひとつとして新たに加わりました）

- ISO14001一括認証取得審査（クロージングミーティング）
（2011年5月、キッコーマン東京本社）



- キッコーマングループISO14001一括認証書



【2013年度】

<2014年度記載>

キッコーマングループは、環境マネジメントを推進するにあたり、ISO14001国際規格を効果的なツールと考え、1997年5月にキッコーマン野田プラント（現：キッコーマン食品野田工場）を手始めに、主要事業所での認証の取得を目標にし

て作業を進め、ついに2011年6月にはキッコーマングループとしての一括認証を取得しました。

キッコーマングループでは、新設の事業所や新たにグループの仲間入りを果たした事業所の認証取得も順次進めており、2013年度には宝醤油がキッコーマングループの一括認証の対象企業のひとつとして新たに加わりました。

【2015年度】

<2016年度記載>

2015年度にはキッコーマンソイフーズ茨城工場がキッコーマングループの一括認証の対象企業のひとつとして新たに加わりました。

- （3）新しい国際規格（ISO14001:2015）認証への移行

【2015年度】

<2016年度記載>

キッコーマングループは、環境マネジメントを推進するにあたり、ISO14001国際規格を効果的なツールと考え、これを活用しています。

2015年9月にISO14001の国際規格自体が大幅に改定されたことに伴い、キッコーマングループでは、一括認証を取得した主要事業所で運用している環境マネジメントシステム（Environmental Management System（EMS））について、新しい国際規格（ISO14001:2015）への移行を目指す準備を開始しました。

移行に必要な変更点を洗い出すために、キッコーマン野田本社およびキッコーマン食品野田工場が、社外の認証機関による「ギャップ分析」を受けました。その内容は、その他主要事業所の管理者、EMS事務局、環境管理責任者に対する報告会を通して、各事業所での新・国際規格への移行のツールとして提供しました。

- ギャップ分析

（2016年1月、キッコーマン食品野田工場）



VI 環境マネジメントの推進

● ギャップ分析結果報告会(2016年1月、キッコーマン野田本社)



【2016 年度】

<2017年度記載>

キッコーマン環境部は、2016年度、ISO14001認証取得企業のエリア（工場や事業所）を順番に巡り、エリア経営層（社長や工場長）、環境管理責任者やEMS事務局担当者、環境関連施設管理者などを対象に、ISO14001:2015講習会を開催しました。

この講習会では、2015年度に改定された新・国際規格ISO14001:2015のポイント（旧・規格(ISO14001:2004)との違い、新たに追加された項目(リスクと機会の把握・取り組み、組織内部・外部の課題の明確化など))を、昨年度（2015年度）にキッコーマン食品野田工場が受診した「ギャップ分析」の結果なども交えながら説明し、受講した社員たちの新・規格に対する理解度、自事業所で新・規格に則った環境マネジメントシステム（EMS）を運用・管理していくために必要な力量の向上を図りました。

● ISO14001:2015講習会

（2016年9月、キッコーマンバイオケミファ江戸川プラント）



【2017年度】

<2018年度記載>

キッコーマングループは、新しい国際規格ISO14001:2015に則った環境保全活動推進体制を再整備し、2017年6月に国内事業所で、ISO14001:2015での一括認証を再取得しまし

た。さらに、新設の事業所や新たにグループの仲間入りを果たした事業所の認証取得も順次進めております。2017年度には、埼玉キッコーマンがキッコーマングループの一括認証の対象企業のひとつとして新たに加わり、対象企業は計19エリアとなりました。

＊2017年4月、平成食品工業は江戸川食品を吸収合併し、キッコーマンフードテックに社名を変更しました。

国内19エリア：①キッコーマン野田本社、②キッコーマン東京本社、③キッコーマンR&D、④キッコーマン食品野田工場（製造第1部、製造第2部、製造第3部）、⑤キッコーマン食品高砂工場、⑥キッコーマン食品近畿支社、キッコーマンバイオケミファ（⑦江戸川プラント、⑧鴨川プラント）、⑨日本デルモンテ（群馬工場、長野工場）、⑩マンズワイン（勝沼ワイナリー、小諸ワイナリー）、キッコーマンフードテック（⑪本社工場および中野台工場、⑫江戸川工場）、⑬北海道キッコーマン、⑭流山キッコーマン、⑮埼玉キッコーマン、⑯宝醤油、キッコーマンソイフーズ（⑰岐阜工場、⑱埼玉工場、⑲茨城工場）

● キッコーマングループISO14001:2015一括認証書



キッコーマン環境部は、2017年度も引き続き、ISO14001認証取得企業のエリア（工場や事業所）を回り、エリアの環境管理責任者、EMS事務局担当者、内部環境監査員を対象とするISO14001:2015講習会を開催しました。今回の講習会は、各エリアの内部環境監査員の監査能力の向上を図るための「内部環境監査員力量向上研修」にも相当するもので、受講者に2015年に改定された新しい国際規格ISO14001:2015の規格要求事項や、新しい規格に則った内部環境監査の手順・ポイントなどを、できる限り分かりやすく講義しました。

VI 環境マネジメントの推進

- ISO14001:2015講習会
(2018年4月、キッコーマン食品高砂工場)



【2018 年度】

<2020年度記載>

キッコーマングループは、2018年4月に、外部の認証機関によるISO14001認証維持審査を受けました。

- ISO14001 認証維持審査
(2018年4月、キッコーマン食品高砂工場)



- ISO14001認証維持審査(現場視察)
(2018年4月、流山キッコーマン)



この2018年度の審査において、キッコーマンフードテック西日本工場(兵庫県高砂市)がキッコーマングループの一括認証の対象企業のひとつとして新たに加わり、対象企業は計20エリアとなりました。

国内20エリア：①キッコーマン野田本社、②キッコーマン東京本社、③キッコーマンR&D、④キッコーマン食品野田工場(製造第1部、製造第2部、製造第3部)、⑤キッコーマン食品高砂工場、⑥キッコーマン食品近畿支社、キッコーマンバイオケミファ(⑦江戸川プラント、⑧鴨川プラント)、⑨日本デルモンテ(群馬工場、長野工場)、⑩マンズワイン(勝沼ワイナリー、小諸ワイナリー)、キッコーマンフードテック(⑪本社工場および中野台工場、⑫江戸川工場、⑬西日本工場)、⑭北海道キッコーマン、⑮流山キッコーマン、⑯埼玉キッコーマン、⑰宝醤油、キッコーマンソイフーズ(⑱岐阜工場、⑲埼玉工場、⑳茨城工場)

- ISO14001認証維持審査
(2018年4月、キッコーマンフードテック西日本工場)



【2019 年度】

<2020年度記載>

キッコーマングループは、2019年4月に、外部の認証機関によるISO14001認証維持審査を受けました。

- ISO14001認証維持審査(クローズングミーティング)
(2019年4月、キッコーマン東京本社)



国内20エリア：①キッコーマン野田本社、②キッコーマン東京本社、③キッコーマンR&D、④キッコーマン食品野田工場(製造第1部、製造第2部、製造第3部)、⑤キッコーマン食品高砂工場、⑥キッコーマン食品近畿支社、キッコーマンバイオケミファ(⑦江戸川プラント、⑧鴨川プラント)、⑨日本デル

モンテ（群馬工場、長野工場）、⑩マンズワイン（勝沼ワイナリー、小諸ワイナリー）、キッコーマンフードテック（⑪本社工場および中野台工場、⑫江戸川工場、⑬西日本工場）、⑭北海道キッコーマン、⑮流山キッコーマン、⑯埼玉キッコーマン、⑰宝醤油、キッコーマンソイフーズ（⑱岐阜工場、⑲埼玉工場、⑳茨城工場）

2) ISO14001の実践

(1) ITの活用

【2005年度】

<2006年度記載>

2006年2月、キッコーマン食品近畿支社がISO14001の認証を取得し、これで2005年度までの中期目標としていた事業所の取得が全て完了しました。

近畿支社は営業現場であるため、認証取得にあたっては出来るだけ業務の負荷を少なくし、省人・省時間で効率よく推進させなければならませんでした。その対策の一環として取り組んだのが、社内専用ホームページ（イントラネット）を立ち上げて文書管理を行う、完全ペーパーレス化でした。社員がイントラネット左のメニューフレームをクリックすることで、意図する書類を画面に開くことが出来るようになりました。

このホームページが活用されるようになり、

○支社全員への情報発信の一元化と情報共有・教育の徹底

○リンク設定による審査・内部環境監査の効率化

○紙資源・印刷コストの削減と資料作成工程の削減

が実現しました。前例のないホームページによる管理でしたが、外部審査からも「使いやすい」と好評でした。今後は、キッコーマン環境部のリーダーシップのもとで、システムの軽量化と質の向上を目指しつつ、他事業所にも電子化を展開する予定です。

● ISO14001認証取得審査（キッコーマン近畿支社）



【2014年度】

<2015年度記載>

キッコーマン東京本社のEMS本部事務局は、環境マネジメントシステム（EMS）の電子化を推し進め、2015年1月にEMS専用の社内ホームページ「東京本社EMSホームページ」を開設しました。

このホームページ上には、EMS関連文書（環境方針・目標、環境管理規定、EMS組織図、環境側面、対象となる法令と法規制順守定期記録、重要環境影響登録簿、マスタープラン、各種作業指示書、部署別の実施計画・評価基準と直近の進捗状況、内部環境監査および外部審査の結果報告書など）に加え、東京本社に配属・異動となった従業員向けの環境教育資料や東京本社EMS本部事務局が発行している情報誌「東京本社EMS通信」なども収納されており、従業員がいつでも簡単にアクセスし、閲覧、学習することができるよう整備されています。この電子化は、EMS活動での紙文書の削減（紙使用量の削減）や廃棄物の削減（紙ごみの削減）にもつながりました。

【2016年度】

<2017年度記載>

キッコーマン野田本社も、環境マネジメントシステム（EMS）関連文書の電子化を進め、2016年4月にEMS専用の社内ホームページ「野田本社ISO14001ホームページ」を開設しました。

キッコーマングループの社員は、このホームページにアクセスすることで、野田本社の環境方針や目標・目的、EMS組織体制、環境管理規定、所属ごとの環境側面、関連する環境法規制（一覧）、実施計画とその進捗状況、内部環境監査および認証機関による審査の結果などの報告書類、今後のスケジュールなどを、いつでも簡単に閲覧できるようになりました。

これまで野田本社で発行していたEMS関連情報誌「Humming-Bird（ハミングバード）」も、2016年度からはホームページ上で読めるようになりました。

【2017年度】

<2018年度記載>

キッコーマン環境部は、2018年3月に社内ホームページ「環境部ホームページ」を開設しました。

このホームページ上には、キッコーマングループの環境憲章（環境理念、行動指針、重点課題）、長期環境ビジョン2030、中期環境方針や、これに基づいて策定される毎年の環境方針、環境マネジメント組織図、各事業所の公害防止管理者をまとめた一覧表、環境関連法規の改定情報、キッコーマングループ廃棄物ガイドラインや環境ヒヤリハット報告書など、環境マネジメントシステム（EMS）の運用上重要な情報の他、環境部が従業員の環境意識の向上のために月1回の頻度で発行している環境メールマガジン「シグナルe³」（シグナルイーキューブ）や毎年開催している「環境講演会」の冊子（講演録）

VI 環境マネジメントの推進

なども収納されており、従業員が自分の都合のよい時間にアクセスし、環境関連情報を確認したり、学習したりすることができるよう整備されています。

(2) ISO14001現場教育

<2010年度記載>

キッコーマングループでは、2011年度までにISO14001の一括認証を取得する目標を定め、2009年度は取得意義の啓発、作業体制の構築などの活動を行いました。

取得意義の啓発活動の一環として、平成食品工業では、2009年度の全社員対象教育と階層別教育に工場全体の環境方針や環境マネジメントシステム研修を取り入れ、一括認証取得のための基礎作りを進めました。

また、流山キッコーマンでは、作業体制の構築として現場でのISOコパーソンの育成を掲げ、社員5名を対象に、月3回、グループ教育を実施しました。



(3) ISO集中講座の開催

<2022年度記載>

キッコーマン環境部では、ISO国際規格(14001:2015)に沿ったEMS(環境マネジメントシステム)をグループ内に定着させるべく、毎年2～3回、グループ内企業で内部環境監査員の資格取得を目指す社員を対象に、ISO14001:2015規格要求事項や内部監査ポイントなどを中心にした2日間程度の監査員養成講座を開催してきました。

2022年度からは、現場でのEMSの具体的な運用をさらに充実させるべく、グループ内企業ごとに内部監査員(および資格取得希望者)を集め、ISO14001:2015の規格に沿った各職場での目標設定、順守義務、成果測定、リスク管理などを具体的に学ぶ、延べ11時間半の集中講座(月2回に分けて5回)を行うことにしました。

調味料を製造するキッコーマンフードテックでは、5月から7月にかけて集中講座が開かれ、4工場から14人が参加しました。同じ製造過程であっても、各工場での具体的な問題点の差が確認され、工場ごとのマニュアル作成や持続可能な仕組み構築の重要性が共有されました。

これからも、グループ内企業ごとの集中講座を開催していく予定です。



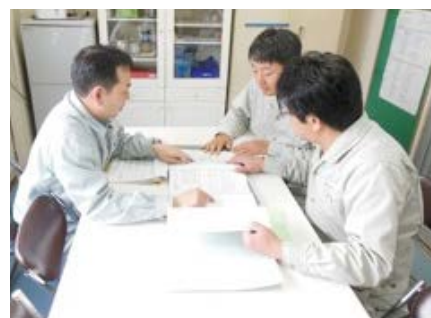
3)環境監査の実施

(1) クロス内部監査の実施

<2013年度記載>

キッコーマングループは、2012年度より、各事業所がISO14001の規格に基づいて実施している内部監査に他事業所の内部監査員が加わる、クロス内部監査を始めました。これは、各事業所間でISO14001推進システムのレベル合わせをすると共に、担当者相互のコミュニケーションを密にすることを目的としたものです。内部監査に新しい視点が加わることは、内部監査員の実力や監査業務の質の向上にもつながり、現場でも好評でした。

● クロス内部監査



(2) 海外製造会社の内部環境監査

キッコーマン環境部は、毎年、海外3地域(アメリカ、ヨーロッパ、アジア)のうちの1地域を巡り、地域内にあるキッコーマングループの生産拠点の内部環境監査や関連施設の視察、従業員への環境教育を行っています。

a) アメリカ地区

【2006年度】

2006年度はアメリカ地域が対象となり、10月、KIKKOMAN FOODS, INC.の2工場(ウィスコンシン工場とカリフォルニア工場)で環境監査が行われました。

VI 環境マネジメントの推進

8月、監査に先立って現地にアンケートを送付して基礎情報を入手し、10月、環境部員1名が現地を訪れ、工場責任者、担当者と情報交換会をひらくとともに、工場や関連施設の視察を行いました。



【事前アンケート報告】

事業所概要

- 環境方針の内容、展開
- ISO14001対応
- 副産物の量と処理法
- 廃棄物の種類、量、処理法
- 排水の量、処理法
- 大気汚染、水質汚濁、騒音、振動、悪臭、土壌汚染、地盤沈下など
- 行政や住民との関係
- 環境に関する国内情勢

【情報交換会内容】

- 環境部より環境情報報告
- 現地環境情報の説明
- 事業所概要
- ISO14001について
- 環境方針
- 認証維持審査内容状況はどうか
- 運用上の問題点
- 法的要求事項（法律的に何か問題になったか）
- 緊急対応（何かあったか、何が考えられるか）
- 環境対策
- 副産物の再生利用方法
- 廃棄物の処理方法
- 排水処理
- 大気汚染他
- 行政や近隣住民からの意見や苦情とその対処
- アメリカ国内の情勢
- 環境に対する住民の意識
- 炭酸ガス排出削減の動向
- 排出権取引、環境税の動向
- CSRの動向

【環境監査報告書項目】

- 操業状況
- 公害問題対策
- 廃棄物・副産物対策
- 環境マネジメントシステム運用
- アメリカにおける環境対応、環境への意識
- 廃棄物処理業者視察

【2009年度】

＜2010年度記載＞

2009年10月、KFIウィスコンシン工場とカリフォルニア工場、同様の内容の内部監査、現場視察、情報提供を行いました。

【2015年度】

＜2016年度記載＞

2015年度には、アメリカ地域を選び、地域内にある生産拠点のKIKKOMAN FOODS, INC. (KFI：アメリカ) のウィスコンシン工場を訪問し、環境保全への取り組みの現状を調査するとともに、従業員に対する環境教育も実施し、従業員の意識向上を図りました。さらに、同地域内にある卸・販売会社や製造委託会社も訪問して施設の視察を行い、環境に関する情報の共有に努めました。

● KIKKOMAN FOODS, INC. (KFI) ウィスコンシン工場



● ウィスコンシン工場従業員に対する環境教育（2015年9月）



VI 環境マネジメントの推進

【2016年度】

＜2017年度記載＞

2016年度はアメリカ西海岸にある生産拠点のKIKKOMAN FOODS, INC. (KFI: アメリカ) のカリフォルニア工場を訪問し、環境保全活動の現状を調査するとともに、従業員に対する環境教育を実施し、従業員の環境保全の意識向上を図りました。同時に、同地域内にあるキッコーマングループの卸・販売会社のJFC INTERNATIONAL INC. (JFC) やKIKKOMAN SALES USA, INC. (KSU)、ITシステム企業のKMS SERVICE INC. (KMS)、および商品開発委託会社なども訪問して施設の視察を行い、情報交換会を設けて環境に関する情報の共有に努めました。

● KIKKOMAN SALES USA, INC. (KSU) での情報交換会 (2016年9月)



● KMS SERVICE INC.での情報交換会 (2016年9月)



【2019年度】

＜2020年度記載＞

2019年9月、キッコーマングループの品質、法務、環境分野を担当する役員および社員が、アメリカにあるしょうゆやしょうゆ周辺調味料（テリヤキソース、てんぷらソースなど）の生産拠点のKIKKOMAN FOODS, INC. (KFI: アメリカ) のウィスコンシン工場を訪問し、それぞれの担当分野から、場内の視察と従業員への教育を行いました。

環境担当の社員は、KFIウィスコンシン工場の環境保全活動の現状調査（省エネ、CO₂や廃棄物の排出量の削減、用水使用量の削減など）、場内の環境関連施設（排水処理施設や廃棄物保管施設）の視察を行うとともに、従業員に対する環境教育も実施し、従業員の環境保全に対する意識のより一層の向上を図りました。

● KIKKOMAN FOODS, INC. (KFI) 従業員に対する教育 (2019年9月)



同時に、同地域内にあるキッコーマングループのマーケットリサーチ会社KIKKOMAN MARKETING AND PLANNING, INC. (KMP: アメリカ) やサプリメント製造販売会社COUNTRY LIFE, LLC (CLL: アメリカ) なども訪問し、施設の視察を行うとともに、従業員との情報交換や環境教育を実施しました。

● COUNTRY LIFE, LLC (CLL)



VI 環境マネジメントの推進

● COUNTRY LIFE, LLC (CLL) 従業員に対する環境教育 (2019年9月)



【2022年度】

＜2023年度記載＞

2022年9月、キッコーマングループの品質、法務、環境分野を担当する役員および社員が、ブラジルにある生産拠点のKIKKOMAN DO BRASIL INDÚSTRIA E COMÉRCIO DE ALIMENTOS E BEBIDAS LTDA. (KDB：ブラジル) 及び卸売会社のTRADBRAS IMPORTACAO E EXPORTACAO LTDAを訪問し、それぞれの担当分野から、場内の視察と従業員への教育を行いました。

環境担当の社員は、KDBの環境保全活動の現状調査（省エネ、CO₂や廃棄物の排出量の削減、用水使用量の削減など）、場内の環境関連施設（排水処理施設や廃棄物保管施設）の視察を行うとともに、従業員に対する環境教育も実施し、従業員の環境保全に対する意識のより一層の向上を図りました。

また、アメリカにあるしょうゆの生産拠点であるKIKKOMAN FOODS, INC. (KFI：アメリカ) のカリフォルニア工場、販売会社のKIKKOMAN SALES USA, INC. (KSU：アメリカ)、卸売会社のJFC INTERNATIONAL INC. (JFC：アメリカ) も訪問し、それぞれの担当分野から、場内の視察と従業員への教育を行いました。

環境担当の社員は、KFIカリフォルニア工場の環境保全活動の現状調査（省エネ、CO₂や廃棄物の排出量の削減、用水使用量の削減など）、従業員に対する環境教育を実施し、従業員の環境保全に対する意識のより一層の向上を図りました。

● 2022年9月 KDB (ブラジル)



● 2022年9月 KFI (アメリカ)



b) ヨーロッパ地区

【2007年度】

＜2008年度記載＞

2007年度はヨーロッパ地域が対象となり、11月、環境部員がオランダのKIKKOMAN FOODS EUROPE B.V.を訪れました。事前アンケートで情報を整理し、現地で、責任者、担当者と情報交換^{*1}を行うと共に現場^{*2}を視察し、監査報告^{*3}を取りまとめました。

*1「情報交換」

事前アンケートの内容確認（事業内容、環境保全活動、ISO14001推進状況、現地状況など）、日本の環境情報紹介、キッコーマングループ環境保全活動紹介など

*2「現場視察」

工場環境、キッコーマン風車、容器包装リサイクル市場など

*3「監査報告」

主要項目：「生産能力と設備状況」「公害対策」「環境マネジメントシステム運用」「行政対応」「その他」



【2010年度】

＜2011年度記載＞

2010年10月、キッコーマン環境部がKFEの内部環境監査を実施しました。ここでは、しょうゆ粕を100%飼料化していますので、その販売促進のためにGMP認証を取得しています。実際にしょうゆ粕飼料を利用している牧場も視察し、しょうゆ粕の飼料としての好適性を確認しました。

VI 環境マネジメントの推進



【2014年度】

＜2015年度記載＞

2014年度には、ヨーロッパ地域を対象に、地域内にある製造拠点のKIKKOMAN FOODS EUROPE B.V. (KFE：オランダ) を訪問し、環境保全への取り組みの現状を調査するとともに、KFEがメインスポンサーとして参加している「フローニンゲン州ザウドラール湖における水質改善プロジェクト」の現場も視察しました。さらに、同地域にある卸・販売会社3社を訪問し、環境に関する情報の共有化に努めました。

- キッコーマン風車（フローニンゲン州ザウドラール湖における水質改善プロジェクト）



- フランスの卸会社での情報交換会



【2018年度】

＜2020年度記載＞

キッコーマングループの品質、法務、環境分野を担当する役員と社員が、2018年9月、ヨーロッパにある生産拠点のKIKKOMAN FOODS EUROPE B.V. (KFE：オランダ) を訪問し、それぞれの担当分野から場内の視察と従業員への教育を行いました。

環境担当の社員は、KFEの環境保全活動の現状（省エネ、CO₂・廃棄物排出量削減、用水使用量削減など）を調査し、場内の環境関連施設（排水処理施設や廃棄物保管施設）の視察を行うとともに、従業員に対する環境教育も実施し、従業員の環境保全に対する意識のより一層の向上を図りました。

- KIKKOMAN FOODS EUROPE B.V. (KFE) 従業員に対する教育（2018年9月）



また、同地域内にあるキッコーマングループの卸・販売会社のKIKKOMAN TRADING EUROPE GmbH (KTE：ドイツ) や JFC INTERNATIONAL (EUROPE) GmbH (JFCEU：ドイツ)、JFC (UK) LIMITED (JFCUK：英国) やJFC HOLLAND B.V. (JFCHL：オランダ) など同時に訪問し、施設の視察を行うとともに、従業員との情報交換や環境教育を実施しました。

- JFC INTERNATIONAL (EUROPE) GmbH (JFCEU) 従業員に対する環境教育（2018年9月）



VI 環境マネジメントの推進

● JFC (UK) LIMITED (JFCUK) 従業員に対する環境教育 (2018年9月)



c) アジア地区

【2005年度】

<2006年度記載>

2005年度はアジア地域が対象となり、11月、昆山統万微生物科技有限公司(中国)、統萬股份有限公司(台湾)、KIKKOMAN (S) PTE. LTD. (シンガポール) をキッコーマン環境部員が訪れ、工場責任者、担当者と情報交換会を開くとともに、工場や関連施設の視察、現地担当者への環境教育を行いました。

- 地球環境と保全活動の意味
- 保全活動が地域にもたらす効果
- 日本や世界各国での環境保全活動
- 環境保全活動と企業活動
- 環境保全活動の実例
- 廃棄物処理業者視察 など



【2008年度】

<2009年度記載>

2008年度は11月に、2005年度と同じグループ企業に対して環境監査を行い、同時に、環境保全担当者と環境情報交換を行いました。環境監査の結果では特に要検討事項はありませんでした。(京都議定書が批准されるなどの変化があったシンガポールでも、グループ企業として特に検討を要する課題は発生していませんでした。)

【2009年度】

<2010年度記載>

2010年3月、タイのサイアムデルモンテ社で初めての内部環境監査を行いました。サイアムデルモンテ社は、デルモンテ・アジアがタイ企業と合併で2004年12月に設立した製造会社で、タイ東部のトラット県でコーン製品などを生産しています。内部環境監査時に、副産物のとうもろこし残さ再生利用現場も視察しました。監査結果は特に問題とするところもなく、今後も情報交流を進めていきます。



【2010年度】

<2011年度記載>

2010年10月、中国石家庄にある統万珍極食品有限公司(PKZ) 趙県工場の内部環境監査を行いました。しょうゆ、酢、料理酒などを生産しているこの工場は、2005年12月から操業を始めていましたが、統万珍極食品有限公司趙県工場として生産を開始したのは2009年1月からです。今回は初めての内部環境監査で、現地スタッフとの意見交換、現場視察などを行い、公害対策、排水処理、副産物再生利用等に大きな問題がないことを確認しました。今後は、地球温暖化防止の視点でのCO₂削減努力について、十分に意思の疎通をはかっていきます。



【2013年度】

<2014年度記載>

2013年度には、アジアの3つの工場(統萬股份有限公司(PKI:台湾)、昆山統万微生物科技有限公司(KPKI:中国)、統万珍極食品有限公司(PKZ:中国))を視察し、排水処理施設の

VI 環境マネジメントの推進

稼働状況や、製造工程から出る廃棄物・副産物の処理の現状などを調査しました。また、工場責任者・管理者と情報交換を行うとともに、管理者への環境教育も行いました。

● 統万珍極食品有限公司 (PKZ) 視察



【2016年度】

＜2017年度記載＞

アジア地域の、しょうゆの生産拠点のひとつである KIKKOMAN (S) PTE LTD (KSP：シンガポール) やコーン製品の生産拠点 SIAM DEL MONTE COMPANY LIMITED (SDM：タイ) の視察も、2016年度（2017年2月）に実施しました。

両工場の現場を視察しながら、省エネ・廃棄物削減などの取り組みを調査するとともに、従業員に対する環境教育も実施しました。シンガポールでは、KSPが支援した人工池「キング・フィッシャー・レイク」造成プロジェクトの現場（国立公園「ガーデン・バイ・ザ・ベイ」）やマングローブ植樹活動の現場（スンガイ・ブロー湿地保護区）も視察しました。

また、シンガポールにあるグループの卸・販売会社の JFC SINGAPORE PTE. LTD. (JFCSG)、KIKKOMAN TRADING ASIA PTE LTD (KTA) や DEL MONTE ASIA PTE LTD (DMA) などとも訪問し、施設の視察や情報交換会を実施して、環境関連情報の共有化に努めました。

● KIKKOMAN (S) PTE LTD (KSP)の従業員に対する環境教育（2017年2月）



● KIKKOMAN TRADING ASIA PTE LTD (KTA) および DEL MONTE ASIA PTE LTD (DMA) での情報交換会（2017年2月）



【2017年度】

＜2018年度記載＞

キッコーマングループの品質、法務、環境分野を担当する役員と社員が、2018年2月、台湾にある生産拠点の統萬股份有限公司 (PKI：台湾) を訪問し、それぞれの担当分野から場内の視察と従業員への教育を行いました。

「品質向上」「顧客満足」を経営理念に掲げる統萬股份有限公司は、環境分野では単位当たりの電力や蒸気、用水の使用量（原単位）削減の目標を設定し、省エネ・水資源保全活動を推し進めています。今回の視察では、場内の環境関連施設（浄水処理施設、排水処理施設、廃棄物保管場所など）の視察と環境保全活動の実態調査を行うとともに、キッコーマングループの環境保全活動情報（直近の活動実績など）を報告することで情報の共有化に勤め、従業員への環境教育を実施して、環境保全意識の向上を図りました。その結果、工程の見直しや省エネ機器への切り替えなどの活動が精力的に推し進められ、目標の進捗度が適切に管理されていることが確認できました。

● 統萬股份有限公司 (PKI) 従業員に対する教育（2018年2月）



VI 環境マネジメントの推進



【2018年度】

＜2020年度記載＞

キッコーマングループの品質、法務、環境分野を担当する役員と社員は、昨年2月の台湾視察に引き続き、2018年8月には中国にある生産拠点の昆山統万微生物科技有限公司（KPKI：中国）および統万珍極食品有限公司（PKZ：中国）を訪問し、場内の視察と従業員への教育を行いました。

今回の視察では、環境担当の社員は、両工場での環境保全活動の実績（省エネやCO₂排出量削減、廃棄物量削減、用水量の削減など）を聞き取り調査した後、場内にある環境関連施設（排水処理施設や廃棄物保管場所など）の視察を行いました。また、キッコーマングループの環境保全活動情報（直近の活動実績など）を報告することにより、環境情報の共有化に努め、従業員への環境教育も実施し、従業員の環境保全意識の向上を図りました。

● 昆山統万微生物科技有限公司（KPKI）従業員に対する教育（2018年8月）



● 統万珍極食品有限公司（PKZ）視察（2018年8月）



また、同時に、中国にある卸・販売会社の亀甲万（上海）貿易有限公司（KST：中国）なども訪れ、場内施設の視察を行うとともに、情報交換会や講義を実施し、環境関連情報の共有化と従業員の環境保全意識の向上に努めました。

● 亀甲万(上海)貿易有限公司(KST)従業員に対する教育（2018年8月）



（3）ISO14001認証未取得会社・事業所の監査

キッコーマングループは、ISO14001認証を取得していない会社・事業所のうち、主な会社・事業所については別途内部環境監査を実施し、環境汚染防止や環境負荷の低減に努めています。

＜2011年度記載＞

2010年度には、グループ内のISO14001未取得事業所のうち、国内では、宝醤油（7月）、キッコーマン総合病院（7月）、総武物流（8月）、日本醤油工業（10月）、海外では、統万珍極食品有限公司（PKZ：中国）（10月）を監査しました。このうち、宝醤油、総武物流、日本醤油工業、PKZの監査は、今回が初めての実施でした。

● 内部環境監査（2010年7月、宝醤油）



【2011年度】

＜2012年度記載＞

2011年度、7月にキッコーマン総合病院及び総武物流の内部環境監査を実施しました。どちらの会社・事業所も、環境マネジメントシステムを適切に運用していました。

VI 環境マネジメントの推進

● 内部環境監査（2011年7月、キッコーマン総合病院）



● 内部環境監査（2013年8月、キッコーマン総合病院）

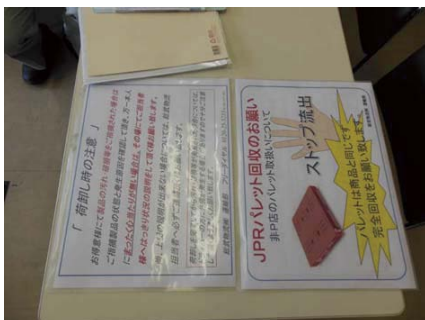


【2012年度】

＜2013年度記載＞

2012年度は、総武物流（7月）及びキッコーマン総合病院（10月）の内部環境監査を実施しました。どちらの会社・事業所でも、環境マネジメントシステムが適切に運用されていました。

● 内部環境監査でのチェックポイント（2012年7月、総武物流）



また、2013年度には、これまでISO14001未取得事業所として同様の内部環境監査を実施していた宝醤油が、外部認証推奨機関による審査結果に基づいて認証を取得し、キッコーマングループ一括認証を受けた事業所（企業）のひとつに加わりました。

【2014年度】

＜2015年度記載＞

2014年度は、8月にキッコーマン総合病院と総武物流、9月に埼玉キッコーマンの内部環境監査を実施しました。いずれの会社・事業所でも、環境マネジメントシステムが適切に運用されていました。

● 内部環境監査（2014年8月、キッコーマン総合病院）



【2013年度】

＜2014年度記載＞

2013年度は、7月にキッコーマン総合病院と総武物流、8月に埼玉キッコーマンの内部環境監査を実施しました。2012年に稼働した埼玉キッコーマンは、今回が初めての監査となりました。また、キッコーマン総合病院は、同年8月から新建屋での営業を開始するため、その直前に監査を実施しました。いずれの会社・事業所でも、環境マネジメントシステムが適切に運用されていました。

VI 環境マネジメントの推進

● 内部環境監査（2014年8月、キッコーマン総合病院）



● キッコーマンソイフーズ茨城工場（茨城県猿島郡）



● 内部環境監査（2014年8月、総武物流）



また、ISO14001認証を取得していない会社・事業所のうち、主な会社・事業所についても、毎年、キッコーマン環境部の社員が訪問し、内部環境監査を実施しています。2015年度も、8月に埼玉キッコーマン、9月にキッコーマン総合病院と総武物流の内部環境監査を実施しました。いずれの会社・事業所でも、環境マネジメントシステム（EMS）が適切に運用されていました。

● 環境マネジメントシステム（EMS）監査 （2015年9月、総武物流）



● 内部環境監査（2014年9月、埼玉キッコーマン）



● 環境マネジメントシステム（EMS）監査 （2015年9月、キッコーマン総合病院）



【2015年度】

<2016年度記載>

キッコーマングループは、環境マネジメントを推進するにあたり、ISO14001国際規格を効果的なツールと考え、グループ内会社・事業所の認証取得を強く推し進めています。2015年6月には、新たにキッコーマンソイフーズ茨城工場（茨城県猿島郡）が、認証機関による審査結果に基づいて認証を取得し、キッコーマングループ一括認証を受けた事業所のひとつに加わりました。

【2016年度】

<2017年度記載>

2016年度は、キッコーマン総合病院と総武物流（10月）および総武サービスセンター（12月）の内部環境監査を実施しました。いずれの会社・事業所でも、環境マネジメントシステムが適切に運用されていました。

VI 環境マネジメントの推進

● 環境マネジメントシステム (EMS) 監査 (2016年10月、キッコーマン総合病院)



● 現場視察：土のう置き場（緊急事態対応装備品）のチェック (2016年10月、総武物流)



E・Tコースでは、「現場における環境パフォーマンスを向上させるために導入されているISO14001」の重要性を説明した上で、現場で実際に取り入れられている「ISO14001の運用実態と環境問題解決への活用法」を紹介し、これから始まる「現場での具体的な仕事内容」に理解を深める内容で行いました。

● Cコース研修風景 (2023年4月、キッコーマン野田本社)



● E・Tコース研修風景 (2023年4月、キッコーマン野田本社)



4) 社員への環境教育

キッコーマングループが定期的に行っている社員研修カリキュラムに、環境保全に関する講座を積極的に組み入れることで、グループ全体への環境保全意識の向上を図っています。

(1) 新入社員研修 ＜2023年度記載＞

キッコーマン環境部では、毎年、新入社員向け「環境研修」を実施しています。

2023年度も、4月に、Cコース（企画・管理、営業など総合職対象）とE・Tコース（企画・事務、製造・設備など一般職対象）2回を実施しました。

Cコースでは、「地球課題としての環境問題」の数々を説明した上で、現在「キッコーマングループが長期環境ビジョンのもとで取り組んでいる様々な環境保全活動」が、世界課題の解決につながっていること、そして、キッコーマンの企業価値向上に貢献していることを説明し、企業活動における環境問題の重要性に理解を深める内容で行いました。

(2) 新任主幹研修 ＜2008年度記載＞

キッコーマンでは、職階のひとつに、管理職の第一歩となる「主幹」というポストを設けています。主幹になると、所属長として組織を統括することが期待され、高度な専門知識と経営管理知識、ビジョンを構築し方針を遂行する能力、組織を管理統率して運営する力、などの資質を育てることが求められます。

人事部では、毎年4月に昇格就任する新任主幹に対して、管理者としての自覚と必須知識を身につけさせるため、「人権啓発」「コンプライアンス」「経営計画」などを含む1泊2日の研修を行っています。その一部として環境部は「環境への取り組み」を紹介するパートを受け持っています。2007年度は5月16日に講義を行いました。

(3) 海外赴任者環境研修 ＜2008年度記載＞

キッコーマンでは、海外赴任者に事前研修を受講させていますが、その中に、海外技術部の依頼に基づく環境研修も含めています。赴任者の現地における業務内容により1日あるいは1週間と、異なった研修スケジュールとなりますが、1週間

VI 環境マネジメントの推進

の場合には以下の内容が基本となっています。

- 1 日目 「キッコーマングループの環境保全活動」
「野田工場環境関連設備見学」
- 2 日目 「日本における環境関連法規」
「野田市廃棄物処理施設見学」
- 3 日目 「ISO14001構築の実践」
- 4 日目 「環境関連分析測定実習」
- 5 日目 「環境会計」「海外工場監査」「公害防止」
「全体レビュー」

(4) 環境メールマガジン「シグナルe³」

<2017年度記載>

キッコーマン環境部は、2016年6月から、キッコーマングループ社員向けに環境メールマガジン「シグナルe³」(シグナリーキューブ)の発行・配信を開始しました。

このメールマガジンは、月1回の発行で、

- ①最近の環境関連ニュース・情報
- ②生活エコ情報：身近でできる省エネ・廃棄物削減・節水活動など

を簡単にまとめたものです。社員一人ひとりが世界での環境政策・活動などに関する知識を深め、環境に対する関心を持ち、日常生活の中で環境配慮・保全意識を持った行動を採るように働きかけることを目的としています。「シグナルe³」というマガジンの名称も、3つの「e」、すなわち「earth(人類共通の財産である「地球」)」「environment(食の根源である「自然環境」)」「ecology(豊かな自然の恵み「いのちの広がり」)」からのシグナル(変化の兆し、合図、きっかけ)に目を向ける姿勢を持ってもらいたいとの思いで付けました。

たとえば、2017年2月発行の「シグナルe³ Vol.9」では①2016年11月に発効した「パリ協定」のポイントと②生活エコ情報「LED電球のススメ」を、3月発行の「シグナルe³ Vol.10」では①パリ協定後の日本の動向と②家庭での取り組みの必要性「節電と断熱」を紹介しています。

● 環境メールマガジン「シグナルe³」



(5) 環境講演会

a) C.W.ニコル氏講演会

【2015年度】

<2016年度記載>

キッコーマン環境部は、環境保全に関する従業員向け講座を開催することで、全従業員の環境保全意識の向上に努めています。

2015年9月には、キッコーマン野田本社(千葉県野田市)とキッコーマン東京本社(東京都港区)において、長年に渡って環境保全活動に取り組んでおられるC.W.ニコル氏を講師に招き、講演会を開催しました。

● C.W.ニコル氏講演会(2015年9月、キッコーマン野田本社)



● C.W.ニコル氏講演会(2015年9月、キッコーマン東京本社)



英国ウェールズ出身のC.W.ニコル氏は、1980年から長野県に住み、1995年には日本国籍を取得。「C.W.ニコル・アファンの森財団」を設立して、荒廃していた黒姫の山林の保全に取り組み、自然を回復させた実績をお持ちで、また東北大震災復興支援にも活動を展開しておられます。

講演会では、ニコル氏は、ご自身のこれまでの実体験をユーモアたっぷりに説明され、一人一人がもっと森や水、動植物など、自然の重要性に気づき、深く関わろうとする姿勢を持ってほしいと話されました。

講演会に参加した社員からは、「自然と触れ合うことの大切さがよく分かった」「自然豊かな日本の良さを改めて再認識した」「自分の身近な自然について考え直すよいきっかけになった」などの意見が寄せられました。

VI 環境マネジメントの推進

後日、講演内容とキッコーマングループCEOとの対談も掲載した冊子『『豊かな自然を考える講演会』記録 C.W.ニコル氏をお招きして』を制作し、グループ内社員に配布することで、当日参加できなかった社員にもニコル氏の話に触れ、自然の大切さについて考える機会を設けました。

- 冊子『『豊かな自然を考える講演会』記録 C.W.ニコル氏をお招きして』



b) 養老孟司氏講演会

【2016年度】

<2017年度記載>

2016年9月、キッコーマン野田本社（千葉県野田市）とキッコーマン東京本社（東京都港区）において、養老孟司氏を講師に招き、講演会を開催しました。

- 養老孟司氏講演会（2016年9月7日、キッコーマン東京本社）



- 養老孟司氏講演会（2016年9月8日、キッコーマン野田本社）



神奈川県鎌倉市生まれ、東京大学名誉教授で解剖学者の養老孟司氏は、ご自身の専門領域を超えて、人間、文化、環境など、広い分野で洞察力のある発言をされておられます。特にご自身で「趣味は昆虫採集」とおっしゃるだけに、昆虫に関する非常に深い造詣をお持ちです。

養老氏は、ご自身の長年に渡る昆虫採集を通して見てきた自然環境の変化に危機感を感じておられることを話され、人間は身体という仕組みを通して自然と深くつながっているのだから、人工物で溢れた都会生活に慣れることなく、暮らしの中で自然を考えることが非常に重要だと説かれました。

講演会に参加した社員からは、「知識・経験豊富な先生のユーモアに富んだ話は、抜群に面白かった」「『環境』の捉え方が、ありきたりな自然科学的なものではなく、先生独特の、哲学的な捉え方で、大変興味深く、とても勉強になった」「先生の『人間自身も自然そのものであり、それゆえに自分と環境に境目がない』との、非常に哲学的な考え方を伺って、自身と環境とのつながりをより強く実感することができた」「ありふれた『自分』『自然』『意識』などの言葉自体についても、いろいろと考え直すきっかけになった」などの意見が寄せられました。

後日、講演内容と、養老氏来社時に催したキッコーマングループCEOとの特別対談の様子とをまとめた冊子を社内配布し、当日は参加できなかった社員にも、養老氏の講演内容を紹介し、自然について考える機会を設けました。

- 冊子『『豊かな自然を考える講演会』記録 養老孟司氏をお招きして ～環境を考える上で大切なこと～』



c) 岸由二氏講演会

【2017年度】

<2018年度記載>

2017年9月、キッコーマン野田本社（千葉県野田市）とキッコーマン東京本社（東京都港区）において、岸由二氏を講師に招き、講演会を開催しました。

●岸由二氏講演会

(2017年9月21日、キッコーマン野田本社)



●岸由二氏講演会

(2017年9月20日、キッコーマン東京本社)



慶應義塾大学名誉教授(進化生態学)、国土交通省河川分科会委員、NPO法人鶴見川流域ネットワーク代表理事、NPO法人小網代野外活動調整会議代表理事などをお務めになる岸由二氏は、「雨水が水系に集まる大地の領域」すなわち「流域」の重要性に着目し、『水を、何トンの水とかいうように「モノ」として考えることと、大地に即して流れる「水のカタチ」、すなわち流域としてとらえることとは根本的な違いがある。水を流域的に見れば、水への働きかけも実践的にできるようになる』という考え方から、日本各地で流域全体を視野に入れた治水活動に力を入れておられます。また、流域が持つ多様な自然力を生かして、『それぞれの姿をしっかりと観察して変化を見定め、それぞれの自然力に適した保全活動を推進する』という考え方の下に、三浦半島小網代の森の保全活動を精力的に進めておられます。

約1時間半の講演会では、「流域が育む奇跡の自然：小網代の谷 ～環境を新しい視点から～」と題し、「水を流域として考えることの重要性」「流域全体を考えない治水活動の危うさ」「流域の視点を生かした防災のあり方」「流域を課題に含めていない日本の教育の欠陥」などを具体的に指摘したうえで、「一つの流域の自然力をまるまる保全している小網代の森」の現状を紹介され、『自然は、一律的に「完成した統合的な生態

系」などとして安定することはない。自然を保護するには、それぞれの姿をしっかりと観察して変化を見定め、それぞれの自然に適した目的を皆で見定めることが大切である』『人間は、二本の足で大地に登場して以来、地球と深く関わってきた。「人間の手が入らないことが自然だ」ということではなく、「自然にどう手を入れるのか」「どう手入れをすれば合理的か」という視点で自然に向き合うことが大切だ』と説かれました。

お話の中では、たとえば『小網代の森のアカテガニは、森に棲み、海で産卵し、子ガニは干潟で成長する。だから、「この地域には、こんな植物がいるから、その場所を守れ」といった自然界の限られた領域だけで生態系を守ろうとする考え方では、保全はうまくいかない。森・干潟・海をひとつくりにした流域思考で考えることが重要になる』などという分かりやすい具体例を、いくつも紹介されました。

講演会に参加した社員からは、「実体験に基づいたお話でよかった」「岸先生の自然保護活動はアグレッシブで励みになった」「身近な生態系の話から哲学的な話まで非常に興味深かった」「流域思考という考え方は興味がもてた。もっと深く知りたいので本を読みたいと思う」「自然保護と災害の関係性が理解できた」「小網代の森に行って、講演ビデオで拝見したカニを見てみたいと思った」などの感想が寄せられました。

後日、講演内容と、岸氏来社時に開催したキッコーマングループCEOとの特別対談とをまとめた冊子を社内配布し、当日は参加できなかった社員にも、岸氏の講演内容を紹介し、自然について考える機会を設けました。

●冊子『豊かな自然を考える講演会』記録 岸由二氏を

お迎えして「流域が育む奇跡の自然：小網代の谷」

(2018年9月12日、キッコーマン東京本社)



d) 南利幸氏講演会

【2018年度】

<2020年度記載>

2018年9月、キッコーマン野田本社(千葉県野田市)およびキッコーマン東京本社(東京都港区)において、南利幸氏を講師に招き、環境講演会「気象情報から読み解く異常気象」を開催しました。

VI 環境マネジメントの推進

● 南利幸氏講演会 (2018年9月12日、キッコーマン東京本社)



● 南利幸氏講演会 (2018年9月13日、キッコーマン野田本社)



南利幸氏は、株式会社南気象予報士事務所の代表取締役。広島大学大学院生物圏科学研究科で気象学を学ばれ、日本気象学会、日本生気象学会、日本花粉学会などに所属、NHK総合テレビ「おはよう日本」やNHKラジオ「かんさい土曜ほっとタイム」などに出演され、気象の解説に取り組んでおられます。

● 南利幸氏 (環境講演会(キッコーマン東京本社)にて)



「気象情報から読み解く異常気象」と題した約1時間半の講演で、南氏は「昔の人は『カエルが鳴くと雨が降る』『朝虹は晴れて夕虹は雨』『月が赤く見えると雨』など、身の回りの動植物の活動や出来事などをよく観察し、その変化から天気を予測していた。現在は、最新式の気象衛星と地上での観測データを基に、大型のコンピューターを使って詳細な天気予報ができるようになったが、その一方で、そうした身の回りの動植物を大切にしておき観察するというのが、感覚的に無くなってきているところは残念に思う」と述べられました。続いて具体的な「天気予報」を題材に、天気図、天気予報用語の意味などをクイズなども交えながら分かりやすく解説されたうえで、最近の気温上昇や集中豪雨などの異常気象に触れ、「天気マークは晴れの表示でも、『ところにより一時雨』などの記載があれば集中豪雨による大災害があり得る」など、異常気象の中での天気予報の見方について注意を呼びかけました。そして、「気温上昇は、これまでの歴史と較べても急速で、たぶん二酸化炭素(CO₂)を大量に放出していることが要因だと思うし、それを止めない限りは今後もどんどん上昇していくと考えたほうがよい」「その対処としては、地球レベルで、化石燃料を使わない社会、二酸化炭素(CO₂)をそれほど出さない生活というものを構築していくこと、また一人ひとりの生活レベルでは、これからは何が起るかわからないということを大前提にして備えることが、それぞれ必要ではないか」と指摘されました。

講演会に参加した社員からは、「テレビで見る南さんが大好きなので、講演が聞けてよかった。トークはユーモアたっぷりで、プレゼン(テーション)力の高さに感銘を受けた」「天気図や降水確率の意味、天気予報のしくみなどがよく理解できた」「気温と環境について考えるよい機会になった」「今年の夏の暑さは凄かった。暮らしに密接な講演内容だったので、家族にも話したいと思った」などの感想が寄せられました。

後日、講演内容と、南氏来社時に開催したキッコーマングループCEOとの特別対談を掲載した冊子を社内配布し、当日は参加できなかった社員にも、南氏の講演内容を紹介し、自然について考える機会を設けました。

● 冊子『『豊かな自然を考える講演会』記録 南利幸氏をお迎えして「気象情報から読み解く異常気象」』



e) 河口真理子氏講演会

【2019年度】

<2020年度記載>

2019年10月、キッコーマン野田本社（千葉県野田市）およびキッコーマン東京本社（東京都港区）において、河口真理子氏を講師に招き、環境講演会「これからの『おいしい記憶』を考える」を開催しました。

● 河口真理子氏講演会

（2019年10月9日、キッコーマン東京本社）



● 河口真理子氏講演会

（2019年10月10日、キッコーマン野田本社）



河口真理子氏は、株式会社大和総研・調査本部の研究主幹。一橋大学大学院修士課程で環境経済を学ばれ、環境経営・CSR・ESG投資、エシカル消費などサステナビリティ全般が御専門。アナリスト協会検定会員、早稲田大学非常勤講師、国連グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン理事、NPO法人・日本サステナブル投資フォーラム共同代表理事、エシカル推進協議会理事、公益財団法人プラン・ジャパン評議員、サステナビリティ日本フォーラム評議委員、WWFジャパン理事、環境省中央環境審議会臨時委員、経済産業省家電リサイクルにかかわる審議会、東京都キャップ&トレード委員会委員などを務めておられます。

● 河口真理子氏

（環境講演会（キッコーマン東京本社）にて）



河口氏は、キッコーマングループのコーポレートスローガン「おいしい記憶をつくりたい。（seasoning your life）」になぞらえて「これからの『おいしい記憶』を考える」と題した約1時間半の講演において、「人間の活動は地球の環境容量を超え、生物学的（気候変動問題、砂漠化、水資源・資源の枯渇、生物多様性喪失、海洋生態系の劣化）に、また社会的（貧富の差の拡大、難民・移民問題、奴隷・児童労働、テロ・サイバーテロ）にも、その持続可能性に疑問符が付き、見直しを迫られている。問題に対する危機意識を持ち、バックカスティング思考（目標とする未来を起点に、今何をすべきかを考える未来起点の発想法）で我々の世界を『変革』する事が必要だ。それは、『大きな機会の時』でもある。パリ協定やSDGsなどの世界的な取り組みは、これまでの『経済ファースト』から『地球・社会ファースト』へのパラダイムシフトを目指した活動だ。金融は、これまでの経済主体の行動を規定する価値基準を変える重要な役割を担うだろう」と指摘されました。

講演会に参加した社員からは、「環境問題に対する意識が高まりました。SDGsへの理解も深まりました」「キッコーマンのビジョンを考慮したテーマで良かった。声も通り、分かりやすかった」「現在の環境がいかに危機的な状況かを再認識し、自分にも何ができるか考えるきっかけになった」「ISO14001事務局をやっているの、環境経営に対する意識が高まった」「今回は特に、IRの仕事で投資家と接しているので、一層興味深く聞きました」「環境問題への向き合い方を変えようと思った。環境への配慮と経済的な成長が両立できていない現状は残念です。同じベクトルにするための努力が、ささやかなことでもいいから、出来るようになればと思う」などの感想が寄せられました。

後日、講演内容と、河口氏来社時に開催したキッコーマングループCEOとの特別対談を掲載した冊子を社内配布し、当日は参加できなかった社員にも、河口氏の講演内容を紹介し、自然について考える機会を設けました。

VI 環境マネジメントの推進

- 冊子『『豊かな自然を考える講演会』記録 河口真理子氏をお迎えして これからの『おいしい記憶』を考える』



(6) eco検定(環境社会検定試験)® ＜2020年度記載＞

キッコーマングループでは、社員の「eco検定(環境社会検定試験)®」受験を推奨しており、受験対策の通信教育の受講料の一部を支援しています。

「eco検定®」は、東京商工会議所主催の、環境に関する知識を問う検定試験です。検定試験では、環境問題への取り組みの歴史から、現在地球規模で起きている、複雑化かつ多様化したさまざまな環境問題、持続可能な社会の実現に向けた行動計画、各主体の役割・活動まで、幅広い環境に関する問題(100点満点)が出題され、70点以上の得点者が「合格者(エコピープル)」と認定されます。環境に関する幅広い知識を身につけ、事業活動に「環境」からの視点・意識を盛り込んだ提案・活動・支援ができる人材の育成は、企業の環境経営の推進にとって必要不可欠であり、eco検定®を社員の教育ツールの一つとして活用する企業が増えています。

和風料理の素「キッコーマン うちのごはん」シリーズを製造している埼玉キッコーマン(埼玉県久喜市)では、ISO14001認証取得(2017年度)前の2016年度から、従業員のeco検定®受験を会社全体で推し進めています(合格者は14名(2018年度末時点))。

● 埼玉キッコーマン



埼玉キッコーマンは、ビジョンとして

○安全・安心なものの作り工場

また経営方針として

○従業員自身が家族・友人に自信を持って紹介できる職場

○約束した品質の製品を作り続け、安全を発信できる工場

○安全・安心なものの作りを武器に、市場で存在し続ける会社を掲げています。埼玉キッコーマンは、この経営方針を達成するためには「人づくり」が重要だと考えて、さまざまな資格の取得を推奨しており、eco検定®受験の推進活動「eco検定®受験で環境意識を向上」もその一環です。

この埼玉キッコーマンの取り組み「eco検定®受験で環境意識を向上」は、キッコーマングループの「第1回 環境表彰」の特別賞に選ばれました。

● 「第1回環境表彰」表彰式「埼玉キッコーマン(特別賞)」 (2019年6月、キッコーマン野田本社)



5) グループ内の情報交換

(1) キッコーマングループ環境担当者情報交換会 ＜2007年度記載＞

キッコーマングループでは、理念の実現と中長期環境方針達成に向けて、グループ各社の環境担当者が緊密に連絡を取り合い、情報交換、問題意識の共有、技術の向上を目指すネットワークを恒常的に機能させています。

2005年10月、キッコーマングループ内に、キッコーマン、利根コカ・コーラボトリング、日本デルモンテ、マンズワイン、美野里フーズ、ヒゲタ醤油、紀文フードケミファ、イトシアの8社からなる「環境担当者情報交換会」(事務局・キッコーマン環境部、年度幹事・各社持ち回り)が設置されました。

毎年、各社環境担当者(2～3名)が集まり、「グループ環境保全統括委員会報告」「出席企業の環境活動報告と質疑応答」「最新のトピックスについての情報交換」などを行い、終了後は懇親会を開いて相互の絆を深めています。

VI 環境マネジメントの推進



第1回は、2005年12月6日、キッコーマン東京本社で開催。
第2回は、2006年11月30日、利根コカ・コーラボトリング
本社で開催。

【2007年度】

＜2008年度記載＞

第3回は、2007年11月22日、日本デルモンテ群馬工場で開催。2006年度までのメンバーから美野里フーズがぬけ、新たに宝醤油が参加しました。

【2008年度】

＜2009年度記載＞

第4回は、2008年12月9日、マンズワイン勝沼ワイナリーで開催。環境トピックスとして、生物多様性とカーボンフット
プリントが取り上げられました。

【2009年度】

＜2010年度記載＞

新たに構成されたキッコーマングループ環境マネジメント
推進体制に組み込まれ、体制図に記載される会議体となりました。メンバーの再構成が行われるため、2009年度は開催されませんでした。

【2010年度】

＜2011年度記載＞

第5回は、2010年9月10日、環境マネジメント推進の一環としてキッコーマン東京本社で開かれました。

（2）野田・高砂工場情報交換会

＜2007年度記載＞

2006年6月、キッコーマン環境部主導の下で、キッコーマン食品野田工場と高砂工場の環境管理担当者間で環境マネジメントシステム運用に関する情報交換会が開催されました。

当日は、9時から16時半の日程で、まず野田工場側より、

- 組織におけるISO14001運用状況
- 「プラスの環境側面」の考え方と実施状況

○ システム取り組み状況

○ 外部環境監査での観察事項とコメント対応状況

について現状説明を行い、続いて高砂工場の現状に照らして
の質疑応答と意見交換がなされました。

ISO14001システムについての情報を、同じ製品（しょうゆ）
を製造する工場同士で交換、共有する機会が持てたことは、
担当者間の協力機運の高まりと共に、システム運用の精度が
深まり、ひいては環境保全活動全体の質の向上に役立った、
と好評でした。初めての試みでしたが、EMS事務局間交流を
今後も進めていくための良いスタートとなりました。



（3）野田・流山環境保全懇談会

＜2009年度記載＞

野田・流山環境保全懇談会は、環境保全・公害防止に関する社会情勢の理解を深め、現場での問題解決力と環境保全努力の向上を目指して、原則年2回（2月、8月）定期的に開催されている会合で、2006年8月にスタートしました。キッコーマン環境部の主導の下で、野田市と流山市に所在するグループ企業（キッコーマン食品、流山キッコーマン、平成食品工業、江戸川食品）の工場における環境保全関係者（所属長、大気・水質・廃棄物管理者および代理）と、キッコーマン生産管理部、研究開発本部の担当者が出席しています。会合では、

- 環境部からの情報提供
 - 現場からの問題提起と成果報告
 - 環境保全委員会など上部組織への提案取りまとめ
 - 他工場、グループ企業との情報交換
 - 環境保全技術・知識の習得
- などが行われています。

VI 環境マネジメントの推進

<2010年度記載>

本懇談会の趣旨は、新環境マネジメント推進体制下の「キッコーマングループ環境担当者情報交換会」に引き継がれることとなり、2009年9月に開かれた第8回懇談会をもって終了となりました。



(4) 高砂工場環境対策委員会

<2008年度記載>

2007年3月、キッコーマン食品高砂工場の環境保全活動のレベルアップを目指し、工場全体における環境面の課題を検討して必要な対策を講ずる委員会として、リーダー・工場長、サブリーダー・環境部長、メンバー・高砂工場の製造、品質管理、設備、総務各部署の責任者による「高砂環境対策委員会」が設置されました。委員会の下には現場担当者と環境部員によるワーキンググループがおかれ、現場での環境保全課題、危機管理のあり方などを検討し、委員会に報告、提案しました。その結果、工場内での環境保全マニュアルなどが再整備され、保全活動全体のレベルがさらに向上しました。環境部も情報提供、保全活動指導などに積極的に関与しました。委員会は、2008年4月に開催された第4回の会合をもって、当初の目的が達せられたことを確認し、解散しました。

(5) 環境関連法令の情報共有

<2008年度記載>

キッコーマン環境部では、部内に環境情報連絡委員会を設置し、法令などの改正に関し、各方面から送られてくる情報や、官報（インターネット）、各種刊行物、講演会、関連団体などを介して知りえた情報を吟味し、簡単な解説を加え、キッコーマングループ内担当者（キッコーマン主要事業所、グループ内企業）に随時メール発信を行うシステムを整えました。この他、環境担当者情報交換会などの会合の場を借りての説明、あるいは必要な場合には特別説明会の開催なども行い、法令情報の徹底化を図っています。頻繁に改正が加えられ、担当者個人での緻密なフォローが難しい法令に対して、組織的に対応するシステムとして好評を得ています。

(6) 環境ヒヤリハット報告の運用

<2014年度記載>

キッコーマングループがISO14001の一括認証を取得したのを機に、各拠点（事業所）は、環境マネジメント強化を目的に、環境ヒヤリハット報告の運用を開始しました。

「環境ヒヤリハット」とは、企業活動の中に潜んでいる、環境汚染などに結びつく危険性のある事象（それゆえに、心理的にヒヤリとしたり、ハッとしたりした経験）を指します。

2012年度からは、各拠点でこうした「環境ヒヤリハット」事象が発生した場合には、報告の義務付け、事象発生原因の調査、有効な再発防止策の検討、これらの報告書とりまとめ、各拠点への配布によって、環境汚染などの事前抑止力の向上が図られています。

● 環境ヒヤリハット報告書（2013年度の報告書）



(7) グループ連携の強化（事業所訪問）

【2012年度】

<2013年度記載>

キッコーマン環境部では、2012年度より、部員2名がグループ内21事業所の環境管理部署を個別に訪問し、実務管理者を対象に、CO₂削減状況と環境管理状況などの意見交換、環境保全活動の総括と環境関連法規の説明などを始めました。これは、実施現場と統括事務局間とのコミュニケーションを密にし、グループ連携の広がり強化することを目的としたものです。

● 情報交換会（流山キッコーマン）



VI 環境マネジメントの推進

● 建設中の醸造棟の視察（マンズワイン勝沼ワイナリー）



● 情報交換会（キッコーマンバイオケミファ江戸川プラント）



【2013年度】

＜2014年度記載＞

キッコーマン環境部は、2013年度は、4～5月度（上期訪問）と10～11月度（下期訪問）の計2回、部員が国内の各生産拠点（＝工場や事業所）を訪れ、現場管理者、環境関連施設管理者や作業従事者との間で情報を交換したり、環境管理施設を視察する「事業所訪問」を実施しました。4～5月度に実施した上期訪問では、特に各工場の排水処理の現状調査に焦点を定めた情報交換・視察を行いました。また、10～11月度に実施した下期訪問では、現場管理者・作業従事者からの現場の稼働状況、環境関連法規制への対応状況、各工場が立案している省エネ・CO₂削減計画の進捗状況などの説明を聞いた後、得られた情報を解析しながら、現状に潜んでいる問題点を洗い出し、対策を提案するとともに、将来に向けての効率的な省エネ・CO₂削減計画のロードマップづくりも手助けしました。

● 情報交換会（江戸川食品）



● 場内雨水路の視察（キッコーマン食品高砂工場）



【2014年度】

＜2015年度記載＞

2014年10～12月度に実施した「事業所訪問」では、現場の稼働状況、各工場での省エネ・CO₂削減計画の進捗や環境関連法規制への対応、環境ヒヤリハットの運用などの実状を聞きました。得られた情報を解析して問題点を洗い出し、対策を提案するとともに、より効率的な省エネ・CO₂削減計画を手助けしました。

● 事業所訪問での情報交換会 （キッコーマンバイオケミファ江戸川プラント）



VI 環境マネジメントの推進

● 排水処理関連施設の視察（日本デルモンテ群馬工場）



【2015年度】

＜2016年度記載＞

2015年7～8月度に実施した事業所訪問では、実際の現場視察を行うとともに、現場管理者・作業従事者から、環境関連施設の稼働状況、環境関連法規制への対応状況、環境ヒヤリハット報告書の運用状況などの説明を受けました。また、2015年度から運用を開始した新しい中期環境方針の趣旨と重要管理目標などの説明を行い、その目標達成に必要な省エネ（およびCO₂排出削減）・節水・廃棄物削減計画・活動などについて意見を交換しました。

● 事業所訪問での情報交換会

（2015年7月、日本デルモンテ長野工場）



● 排水処理施設の視察

（2015年7月、平成食品工業本社工場）



【2016年度】

＜2017年度記載＞

キッコーマン環境部は、2016年11月～2017年1月に、国内の生産拠点（工場）と主要な事業所（キッコーマン野田本社、東京本社、近畿支社、R&Dなどの営業・間接部門）を訪問して、「情報交換会」を開催し、キッコーマングループの環境保全活動の実績（中期環境方針の目標達成度など）を報告するとともに、各事業所の現場の稼働状況やCO₂排出量・廃棄物排出量・用水使用量などの削減計画とその進捗状況などに関する情報を聞き取り調査しました。また、場内・事業所内を「視察」し、生産・事業活動が環境に悪影響を及ぼすリスクが潜在していないかのチェックを行いました。

● 事業所訪問での情報交換会

（2016年12月、日本デルモンテ群馬工場）



● 場内視察

（2016年11月、キッコーマン食品野田工場（製造第3部））



VI 環境マネジメントの推進

【2017年度】

＜2018年度記載＞

キッコーマン環境部は、2017年11月～2018年1月に、国内の生産拠点（工場）と主要な事業所（キッコーマン野田本社、東京本社、近畿支社、R&Dなどの営業・間接部門）を訪問して、「情報交換会」を開催し、キッコーマングループの環境保全活動の現状（直近のCO₂・廃棄物排出量や用水使用量と、中期環境方針の目標達成度など）と、2030年度に向けての活動計画に関する情報を聞き取り調査しました。また、場内・事業所内の環境保全関連施設（排水処理施設や廃棄物保管場所など）を視察し、生産・事業活動が環境に悪影響を及ぼすことがないように、適切に管理・運用されているのか、チェックしました。

● 事業所訪問での情報交換会 （2017年12月、埼玉キッコーマン）



● 場内視察（排水処理施設） （2018年1月、流山キッコーマン）



【2018年度】

＜2020年度記載＞

キッコーマン環境部は、2018年10月～2019年1月に、国内の生産拠点（工場）と主要な事業所（キッコーマン野田本社、東京本社、近畿支社、R&Dなどの営業・間接部門）を訪問して、「情報交換会」と「現場視察」を行いました。

この事業所訪問では、まず「情報交換会」を開催し、キッコーマングループの環境保全活動の基本姿勢や2030年度に向けての長期環境ビジョン、2018年度から運用を開始した中期環境方針2018-2020などを説明し、各工場・事業所での直近のCO₂や廃棄物の排出量・原単位、用水使用量・原単位などの実績値や活動上の問題点などの情報を交換しました。また、2018年度に新設した「環境表彰」制度についても説明し、制度の周知に努めました。情報交換会の終了後の「現場視察」では、場内・事業所内の環境保全関連施設（排水処理施設や廃棄物保管場所など）を視察し、これらの施設が適切に管理・運用され、環境に配慮した生産・事業活動が行われているか、調査しました。

● 事業所訪問での情報交換会 （2018年11月、キッコーマンソイフーズ茨城工場）



● 場内視察 （2018年11月、キッコーマン食品野田工場製造第2部）



VI 環境マネジメントの推進

【2019年度】

<2020年度記載>

キッコーマン環境部は、2019年10月～2020年1月に、国内の生産拠点（工場）と主要な事業所（キッコーマン野田本社、東京本社、近畿支社、R&Dなどの営業・間接部門）を訪問し、「情報交換会」と「現場視察」を行いました。

「情報交換会」では、キッコーマングループの環境保全活動の中期環境方針2018-2020や長期環境ビジョンなどを説明し、各工場・事業所での直近のCO₂や廃棄物の排出量・原単位、用水使用量・原単位などの実績値や、活動上の問題点などの情報を交換しました。情報交換会終了後には、「現場視察」を行い、工場・事業所内の環境保全関連施設（排水処理施設や廃棄物保管場所など）を視察し、これらの施設が適切に管理・運用され、環境に配慮した生産・事業活動が行われているかを調査しました。

● 事業所訪問での情報交換会

（2019年11月、北海道キッコーマン）



● 事業所訪問での情報交換会

（2019年12月、キッコーマンバイオケミファ鴨川プラント）



● 場内視察（排水処理施設）

（2019年11月、キッコーマンフードテック本社工場）



● 場内視察（醸造棟）

（2019年12月、マンズワイン勝沼ワイナリー）



6) 専門教育

（1）内部環境監査員養成研修

キッコーマン環境部では、毎年、社内各事業所の内部環境監査員候補者（40名前後）を対象にして、環境国際規格ISO14001に基づく内部監査に必要な知識と監査技能を習得するため、外部講師による、「ISO14001内部監査員養成講座」を開催しています。講座終了時点で修了評価を行い、合格者には修了証が発行されます。

【2022年度】

<2022年度記載>

2022年8月24日、社外の専門講師を招き、内部環境監査員養成講座を開催しました。今回は集合方式の研修会ではなくリモート方式とし、同じ内容でそれぞれ対象者を変えて、午前と午後に分けて行いました。

受講したキッコーマングループ各社の社員計60名（午前・午後30名ずつ）が、新たに内部環境監査員となりました。

VI 環境マネジメントの推進

●内部環境監査員養成研修

(2022年8月、キッコーマン野田本社)



(2) 内部環境監査員力量向上研修

キッコーマン環境部は、2013年度から、各拠点の内部環境監査員を対象とする力量向上研修を実施しています。研修では、監査において必須のISO14001規格要求事項に関する講義の他、各拠点の具体的な監査ポイントや監査の際の着眼点などについても触れ、監査員ひとりひとりの監査能力の向上を図っています。

【2019年度】

<2020年度記載>

2019年9月、キッコーマン東京本社において、外部から専門講師を招き、ISO14001内部環境監査員資格を有する社員を対象に、内部環境監査員力量向上研修を開催しました。

また、キッコーマン環境部の社員がISO14001認証取得企業のエリア（工場や事業所）を順番に回り、各エリアの内部環境監査員などを対象に、新しい国際規格ISO14001:2015に則った内部環境監査能力の向上を目的とする講習会も開催しました。

●ISO14001:2015講習会

(2019年9月、キッコーマン東京本社)



(3) 排水処理施設管理者研修

<2023年度記載>

キッコーマン環境部では毎年、社外の排水処理専門業者を講師に招き、キッコーマングループ国内主要拠点の排水処理施設管理者を対象とした「排水処理施設管理者研修」を実施しています。

この研修で受講者は、まず排水に関する規制と違反事例、罰則、排水の水質の指標とその特徴・注意点、測定方法・測定機器など、排水処理施設の管理上必要不可欠な知識・知見を再確認します。そのうえで、好気的な排水処理方法である標準活性汚泥法を題材に、負荷量を考慮した安定的な施設の運転設計、さらにはセンシング技術とAI（人工知能）の活用によるIOT自動化の事例を学びます。

また、研修終了後には習熟度テストを実施し、受講者の理解度をチェックしています。

●排水処理施設管理者研修

(2022年、キッコーマン野田本社)



(4) 産業廃棄物管理者研修

<2023年度記載>

キッコーマン環境部では毎年、社外の専門家を講師に招き、国内生産拠点の産業廃棄物管理者などを対象とする「産業廃棄物管理者研修」を実施しています。

VI 環境マネジメントの推進

この研修では、キッコーマングループが「廃棄物処理法」に則って適正な廃棄物処理を実施・継続していくために運用している「キッコーマングループ 廃棄物に関するガイドライン」と、最近のトピックスについて学習しています。

- 産業廃棄物管理者研修
(2019年12月、キッコーマン東京本社)



業廃棄物の収集・運搬及び処分作業の現状報告や事故など緊急事態発生時の対応策などの説明を聞くとともに、キッコーマングループで運用している「廃棄物ガイドライン」について説明を行い、情報の共有化に努めました。

- 産業廃棄物の収集・運搬及び処分業者との情報交換会
(2017年2月、キッコーマン東京本社)



7) 協力会社

- (1) 取引業者への環境教育
＜2012年度記載＞

日本デルモンテは、取引業者と定期的に環境影響の低減について協議しています。2011年度、長野工場では、環境影響の大きい業者と年2回協議を実施しました。群馬工場では、営繕関係10社に工場の環境取組みを説明し協力依頼しました。本社では、ビル管理会社と輸送会社に対して、ISO14001についての説明会を開きました。

- 日本デルモンテ長野工場



＜2020年度記載＞

キッコーマングループは、2018年6月、キッコーマン東京本社において、産業廃棄物の収集・運搬及び処分業者との情報交換会を開催しました。

この情報交換会では、産業廃棄物の収集・運搬及び処分を委託契約している各社の取り扱う産業廃棄物の種類や収集・運搬、中間処理、焼却・肥料化処理などの処理能力に関する報告を受けた後、産業廃棄物管理票（紙マニフェスト及び電子マニフェスト）の運用や、収集・運搬及び処分業者の視察、従業員の教育などに関して、活発な情報交換を行いました。

- 産業廃棄物の収集・運搬及び処分業者との情報交換会
(2018年6月、キッコーマン東京本社)



- (2) 関係業者との情報交換会
＜2017年度記載＞

キッコーマングループは、委託契約している産業廃棄物の収集・運搬及び処分業者との情報共有化のさらなる強化を図るために、2015年度から情報交換会を開催しています。

2017年2月にキッコーマン東京本社で開催した情報交換会では、業者側から、キッコーマングループから排出される産

- (3) 産業廃棄物業者懇談会の開催
＜2022年度記載＞

キッコーマン環境部では、産業廃棄物処理を委託している業者と、コンプライアンスの共有を目的として、年に一度懇談会を開催しています。

VI 環境マネジメントの推進

コロナ禍のため2年ほど開催ができませんでしたが、2021年11月、委託契約を結んでいる大手10社の参加を得て、第4回目の懇談会を開催しました。

席上、キッコーマングループの業務を支える産業廃棄物処理業務の重要性を確認しながら、処理業者の破綻事例をもとに法令順守の重要さと、持続可能な業務契約維持に必要な社内管理の在り方などについて意見交換をしました。



8) 社内評価

(1) 環境表彰

<2020年度記載>

キッコーマングループは、2018年度に「環境表彰」制度を新設しました。

これは、各工場・事業所での環境保全活動のうち、

- 省エネルギー対策やCO₂排出量削減策
- 用水使用量の削減や効率化
- 排水基準管理の徹底や処理の効率化や排水水質の向上
- 廃棄物・副産物の削減と再資源化の向上
- 環境配慮型容器・包装の開発
- 環境マネジメントシステム (EMS) の効率的運用と継続的な改善
- 地域・一般社会とのコミュニケーション推進 (環境美化活動など)

などの点で特に目覚しい成果を挙げた活動や注目に値する活動を対象に表彰する制度です。

「第1回 環境表彰」では、各工場・事業所から示された、最近のキッコーマングループの工場・事業所の環境保全活動24件の中から、2019年5月の環境保全推進委員会において、以下の活動が選ばれました。

【最優秀賞】(1活動)

キッコーマン食品野田工場製造第1部「製麺加湿方法の改善」

【優秀賞】(4活動))

流山キッコーマン「排水処理運転方法の改善」

キッコーマングループ近畿事務所「働き方改革による環

境負荷の低減」

キッコーマンソイフーズ茨城工場「温水設備の改良、有効利用」

キッコーマンフードテック西日本工場「充填作業改善による資源の有効活用」

【特別賞】(3活動)

埼玉キッコーマン「eco検定®受験で環境意識を向上」

キッコーマン食品東北支社「営業部門における環境に配慮した取り組み」

日本デルモンテ、日本デルモンテアグリ「デルモンテアグリ製品でグリーンカーテン」

6月(環境月間)にキッコーマン野田本社にて表彰式を開催し、受賞した工場・事業所には、キッコーマン常務執行役員CPO(環境担当)から表彰状と盾が授与されました。

- 表彰式「キッコーマン食品野田工場製造第1部(最優秀賞)」(2019年6月、キッコーマン野田本社)



- 表彰を受けた事業所メンバー(2019年6月、キッコーマン野田本社)



キッコーマン環境部では、受賞した工場・事業所および活動の詳細を分かりやすくまとめた環境メールマガジン「シグナルe3」を発行することにより、活動情報を全社に水平展開するとともに、キッコーマングループの全従業員が環境保全の重要性を考える機会づくりと環境保全に対する意識向上を図りました。

VI 環境マネジメントの推進

<2023年度記載>

2022年4月、「第2回環境表彰」が行われました。

2019年4月から2022年3月の間にキッコーマングループ事業所内で行われた環境活動例を対象にしたところ、27件の応募があり、2022年11月29日に開かれた「環境保全推進委員会」で以下の活動が選ばれました。

【最優秀賞】(1活動)

- キッコーマン食品 野田工場製造第1部 製麺G「円型製麺蒸気量削減」

【優秀賞】(3活動)

- キッコーマン CC 部 社会活動 G「食のサステナビリティをテーマにした料理講習会を実施」
- キッコーマン食品 野田工場製造第2部 チーム中根「プレートヒーターのCIP洗浄プログラム変更」
- キッコーマンフードテック 西日本工場 製造第1/第2G「設備の容量アップおよび冷却水・洗浄水最適化による用水削減」

【優良賞】(3活動)

- キッコーマンフードテック 江戸川工場 エキスG/穀類G/生産管理G「オペレーターのボイラー停止によるCO₂排出量削減」
- キッコーマンソイフーズ岐阜工場 環境保全G「充填室空調機更新による電気使用量及びび用水使用量削減」
- 8事業所[S F 岐阜工場、総合病院、埼玉キッコーマン、R & D (中央研究所及び醸造開発センター)、野田本社、K F 野田工場、K F T 中野台、K F E]「電力の100%再エネ活用によるCO₂排出量削減」

【Good Action賞】(2活動)

- キッコーマンクリーンサービス「野田本社の廃棄物削減」
- キッコーマン食品 東北支社仙台営業課加工用G「加工用得意先でのSDGs講習会」

2023年1月11日、キッコーマン野田本社で表彰式が行われ、受賞した工場・事業所に対し、キッコーマン常務執行役員(環境担当)から表彰状と盾が授与されました。

● 表彰式(2023年1月、キッコーマン野田本社)



(2) 環境標語

<2018年度記載>

キッコーマングループは、グループ内での「環境を大切にす風土づくり」を推し進めており、従業員一人ひとりが環境の重要性を考える「きっかけづくり」のひとつとして、環境月間に当たる2017年6月(毎年6月5日は「環境の日」)に、全従業員を対象に、「環境を大切にしよう」と呼びかける環境標語の募集を実施しました。

合計819件にも上る応募作品の中から、三段階にわたる審査を経て、以下の入選作品14作品が選ばれました。

【最優秀作】(1作品)

温暖化 地球が出した イエローカード
(キッコーマン食品野田工場社員)

【優秀作(特別賞)】(1作品)

100年後 残しておきたい 青い地球(ほし)
(日本デルモンテ群馬工場社員)

【優秀作】(2作品)

むだにしない 意識の量だけ ゴミが減る
(キッコーマンソイフーズ岐阜工場社員)

垂れ流し 知らず知らずに 水の危機
(キッコーマン飲料社員)

【佳作】(10作品)

ムダ省きもっと減らせる廃棄物 こつこつ工夫大きな成果
(キッコーマンビジネスサービス社員)

守りぬこう 日々のエコで 子の未来
(キッコーマンソイフーズ岐阜工場社員)

エコ活動 小さな気遣い 大きな財産
(キッコーマンフードテック本社工場社員)

買う前に 捨てるその時 考えて
(キッコーマン食品新潟支店社員)

あたりまえ? いつもの作業を見直そう
(キッコーマンソイフーズ埼玉工場社員)

少しでも CO₂CO₂(コツコツ)削減 私から
(キッコーマンバイオケミファ鴨川プラント社員)

誰かじゃない あなた自身が止める 温暖化
(キッコーマンソイフーズ岐阜工場社員)

高めよう 一人ひとりの エコ意識
(キッコーマンソイフーズ茨城工場社員)

限りある 地球の資源 大切に
(キッコーマンソイフーズ岐阜工場社員)

分別で 貴重な資源 再利用
(キッコーマンフードテック本社工場社員)

これらの入選作品は、キッコーマン環境部で発行している「環境メールマガジン」に随時掲載したり、さまざまな環境教

VI 環境マネジメントの推進

育の場面などでも活用し、従業員の環境保全に対する意識向上を図るためのツールとして利用しています。

<2022年度記載>

2021年6月、キッコーマングループは国内全従業員を対象に、環境標語の募集を行いました。これは、全従業員に環境保全の重要性を認識してもらうために2017年に行った募集の第2弾にあたるものです。

応募総数は前回は上回る1028作品。3段階の審査を経て、以下の16作品が入選しました。

【大賞】(1作品)

脱炭素！ 未来につなげる 第一歩

(キッコーマン食品野田工場社員)

【金賞】(6作品)

フードロス 作る責任 廃棄ゼロ

(キッコーマン食品野田工場社員)

これからは サステナブルが あたりまえ

(キッコーマンソイフーズ岐阜工場社員)

製造者つくる責任最後まで、未来に残そうきれいな地球

(キッコーマンソイフーズ埼玉工場社員)

SDGs 未来に向けた 合言葉

(キッコーマンソイフーズ商品技術開発部社員)

減らそうフードロス つくろうおいしい記憶、

皆で取り組む環境活動

(キッコーマンフードテック西日本工場社員)

いつまでもあると思うな水資源 この一滴を大切に

(キッコーマンソイフーズ埼玉工場社員)

【銀賞】(9作品)

見直そう 買いすぎ 捨てすぎ 作りすぎ

(キッコーマンフードテック江戸川工場社員)

ECO活動 変えるは自分の意識から

(キッコーマンソイフーズ岐阜工場社員)

環境を 守る一手を あなたから

(キッコーマンソイフーズ埼玉工場社員)

「もったいない！」地球が喜ぶ エコワード

(キッコーマンフードテック社員)

温暖化 地球が発する SOS

(キッコーマンソイフーズ茨城工場社員)

今すぐに あなたの变化が 地球を守る

(キッコーマン国際食文化センター社員)

エコ活動 出さない 捨てない 汚さない

(キッコーマンソイフーズ茨城工場社員)

どの川も 母なる地球の 大動脈

(キッコーマン食品近畿支部営業部社員)

この先も 自分で守る 水の星

(キッコーマンソイフーズ埼玉工場社員)

8月の表彰式には、受賞者を代表して大賞受賞者が出席し、表彰状と盾が授与されました。



9) 社外評価

キッコーマングループは、社外団体による調査に、積極的に参加し、自社の環境保全活動に対する公平性・客観性の高い評価を得ることにより、自社の活動のより改善・改良へとつなげるように努めています。

(1) 日経「SDGs経営調査」

【2022年度】

<2023年度記載>

日本経済新聞社が、日経リサーチの協力を得て1997年から開始した、企業の経営と環境対策との両立性を評価して順位付けを行う日経「環境経営度調査」は、2019年から、企業の

- ①SDGs戦略・経済価値
- ②社会価値
- ③環境価値
- ④ガバナンス

の計4項目について評価し、格付け(ランキング)を行う日経「SDGs経営調査」に変わりました。

2022年5月～7月に行われた調査では、キッコーマングループを含む886社の評価、格付けが行われました。

キッコーマングループの総合ランキングは「★3.5」(偏差値59.8)でした。内、環境価値については偏差値62.4で、特に、「気候変動、資源、生物多様性」「消費電力」「水資源」「温暖化ガス・脱炭素」の指標で高評価を得ました。

(2) 東洋経済「CSR企業ランキング」

東洋経済「CSR企業ランキング」は、東洋経済新報社「財務・企業評価チーム」が毎年行っている、財務と社会的責任(CSR)との両面に優れた企業を選び出すためのアンケート調査です。

【2022年度】

＜2023年度記載＞

東洋経済新報社は、キッコーマングループを含む1,702社（上場企業1,640社および未上場企業62社）を、財務および社会的責任（CSR）の両面から評価して順位付けした東洋経済「CSR企業ランキング2023年版」を、週刊東洋経済2023年2月18日号で発表しました。

キッコーマングループの「環境」に関する評価は94.2ポイントで、上場企業全体での順位は29位でした。CSR全体での総合順位（上場企業）は178位で、食品製造業では10位となりました。

（3）CDP

【2022年度】

＜2023年度記載＞

CDP（本部：ロンドン）は、企業や自治体に、環境問題対策に関して情報開示を求め、また、それを通じてその対策を促すことを主たる活動としている非営利組織です。

同団体は、主要な国の時価総額が比較的大きい企業に対して、環境に関する情報開示度とパフォーマンス度について回答を求め、その結果を評価（スコアリング）し、公表しています。

キッコーマングループは、2014年度から「CDP気候変動質問書」に回答し、自社の環境保全活動、特に事業活動に伴うCO₂の排出量の削減などの取り組みが世界的にどのような水準にあるのかを客観的に把握するためのツールとしても活用しています。

「CDP気候変動レポート2022：日本版」に公表された2022年度のキッコーマングループの評価結果は、リーダーシップに分類され、A-（Aマイナス）でした。（全世界平均、アジア地域平均、食品・飲料業平均はいずれもCです。）11の評価項目中、「ガバナンス」「排出削減活動」など4項目で「A」評価を受けました。

また、「CDP水セキュリティレポート2022：日本版」に公表された2022年度のキッコーマングループの評価結果は、リーダーシップに分類され、A-（Aマイナス）でした。（全世界平均、アジア地域平均、食品・飲料業平均はいずれもB）。11の評価項目中、「定量的目標と定性的目標」「水のアカウントリング」など7項目で「A」評価を受けました。

（4）ESG株価指数（インデックス）への組み入れ

＜2020年度記載＞

昨今、企業の「財務情報」に加え、

①環境（Environment）への配慮と取り組み

CO₂排出量の削減、水使用量の削減や水環境の保全、生物多様性の保全などの取り組み

②社会（Social）への配慮と取り組み

人材の多様性（ダイバーシティ）、女性の活躍、従業員の健康、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）、地域社会への貢献、人権の尊重などの取り組み

③企業統治（（コーポレート・）ガバナンス（Governance））の体制と取り組み

取締役会の構成、法令遵守、公正な競争、リスクマネジメント、情報公開などの取り組み

などの、長期的な企業の成長や利益を左右すると評される「非財務情報」も考慮して、企業の価値を推し測り、株式投資の是非を決定するESG投資が、急速に拡大しています。

2006年4月に、当時の第7代国際連合事務総長コフィー・アナン氏が、機関投資家に向けて、ESGを投資プロセスに組み入れた「責任投資原則（Principles for Responsible Investment（PRI））」を提唱したことがきっかけとなって、このESG投資の考え方が広がりました。

2018年時点で、2232の年金基金や運用会社などの機関投資家がこのPRIに署名しており、国際団体GSIA（Global Sustainable Investment Alliance）の報告書「2018 Global Sustainable Investment Review（GSIR）」によると、世界のESG投資残高は30兆6830億ドル（約3418兆円）にのぼると推計されています。日本でも、たとえば運用資産額159兆2154億円（2018年度末時点）にものぼる年金積立金管理運用独立行政法人（Government Pension Investment Fund（GPIF））が2015年にPRIに署名、2017年から運用資金の一部をESGに配慮して組成された「ESG株価指数（インデックス）」を用いた投資に回し始めたことから、ESG投資に対する注目が急速に高まり、日本のESG投資残高も2018年時点で240兆円にまで拡大しています。

ESG株価指数（インデックス）とは、こうしたESGの観点から設定された基準に沿った評価において、評価結果の高かった上場企業群（銘柄群）のみで組成された株価指数であり、株式投資での投資プロセスにESGの観点を組み入れるためのツールとして利用されています。指数会社（指数を作り出した証券取引所や証券会社、専門の指数組成会社など）は、組入銘柄群の採用基準と評価結果を公表しています。

キッコーマン(株)（銘柄コード：2801）は、ロンドン証券取引所グループのFTSEラッセル社が2001年に、環境（E）・社会（S）・企業統治（G）のグローバル・スタンダードを充足している企業への投資を促進させるためのツールとして開発した株価指数「FTSE4Goodインデックスシリーズ」の構成銘柄に組み入れられています（2018年6月現在）。

また、キッコーマン(株)は、年金積立金管理運用独立行政法人（GPIF）が日本株へのESG投資のために採用している2つの総合型（ESG）株価指数

○FTSE ブロッサムジャパン指数

FTSEラッセル社が開発し、GPIFが2017年から採用したESG株価指数（インデックス）

○MSCIジャパンESGセレクト・リーダーズ指数

米国のMSCI社（モルガン・スタンレー・キャピタル・インターナショナル社）が開発し、GPIFが2017年から採用したESG株価指数（インデックス）

及び

○MSCI日本株女性活躍指数

特に女性活躍に注目した日本株投資のために、米国のMSCI社（モルガン・スタンレー・キャピタル・インターナショナル社）が開発し、GPIFが2017年から採用した株価指数（インデックス）

○S&P/JPXカーボン・エフィシエント指数

特に環境への配慮を重視した日本株投資のために、S&Pダウ・ジョーンズ・インデックス社と日本取引所グループが共同開発し、GPIFが2018年から採用した株価指数（インデックス）

の、計4種類の株価指数のすべてに組み入れられています。ちなみに、日本株に投資するこれら4つの株価指数すべてに組み入れられている食品製造業は、キッコーマン(株)を含め、わずか5社しかありません（2018年12月現在）。

（5）「環境 人づくり企業大賞2020」の優秀賞

＜2021年度記載＞

キッコーマン株式会社は、環境省が主催する「環境 人づくり企業大賞2020」*において、大企業区分の優秀賞を受賞しました。自然が豊かであることが事業活動と密接に関わっているキッコーマングループが、組織横断的に、環境業務にかかわる研修、講習、啓発、技術支援などの、さまざまな人材育成活動を網羅的に行っていることが評価されました。



*環境省主催「環境 人づくり企業大賞」

「環境 人づくり企業大賞」は、「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」第22条の2第2項に基づいて、環境に配慮した企業等活動をリードする人材を育成して輩出し、その活動をバックアップする企業を環境省が表彰するもので、2020年度は7回目の開催となります。表彰対象は、中小企業区分と大企業区分に分けられています。

（6）産業廃棄物事業功労者への感謝状受賞

＜2022年度記載＞

千葉県には、廃棄物などの発生抑制や資源の循環利用などを通して、循環型社会形成推進に功労のあった個人や組織を表彰する制度があります。令和3年度には、その制度の中の「産業廃棄物関係事業功労者」としてキッコーマン環境部の糸川吉実さんが選ばれ、2022年1月に千葉県環境生活部長から感謝状が授与されました。

感謝状授与には、糸川さんが長きにわたりキッコーマン環境管理業務に従事し、廃棄物の適正処理の実践、グループ各社の再資源化率の向上、廃棄物処理業者の選定、処理施設への現地視察など、排出事業者として廃棄物処理の流れを適正に管理してきたこと、さらに、近年、廃棄物研修会を開催し、廃棄物担当者や若い世代の人材育成に努めるなど、産業廃棄物の適正処理に多大なる貢献をしてきたことが評価されています。

